

一般国道8号

糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書

岩倉遺跡

2003

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号

糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書

岩倉遺跡

2003

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道8号は新潟市を起点とし、京都市に至る、北陸地方と京阪神地方を結ぶ日本海側の幹線道路であり、新潟県の社会・経済の発展に大きな役割を果たしてきました。

しかし、現在の糸魚川市域の国道8号は、交通渋滞・交通事故・降雪時の交通障害・騒音等の交通環境の悪化が深刻な問題となっています。糸魚川東バイパス建設事業は、このような問題を解決し、幹線道路としての役割や地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

糸魚川地区は、古くは縄文時代からの多くの遺跡が密集する地域であり、これまでの発掘調査によっても貴重な成果が得られています。今回調査した岩倉遺跡では、室町時代から江戸時代に至る遺構と遺物が発見されました。

調査の結果、建物跡や水田跡と思われる遺構、多数の土器や陶磁器に加え、多様な木製品、金属製品が出土し、当時の人々の暮らしぶりを考える上で貴重な資料となりました。

今回の報告が、今後の中世史研究に資すると共に、県民の皆様の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査に際して多大な御協力と御援助を賜りました糸魚川市教育委員会並びに地元の方々、また調査から報告書刊行に至るまで格別の配慮を賜った国土交通省北陸地方整備局高田工事事務所に対し、深甚なる敬意を表します。

平成15年3月

新潟県教育委員会

教育長 板屋 越鱗一

例　　言

- 1 本報告書は新潟県糸魚川市田伏字岩舟403番地ほかに所在する岩倉遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い、新潟県教育委員会(以下、県教委)が国土交通省から受託して実施したものである。
- 2 発掘調査は、調査主体である県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団)に発掘調査を委託し、平成13年度に実施した。
- 3 航空写真撮影は、株式会社イビソクに委託した。
- 4 発掘調査作業及び関連諸工事については、株式会社帆刈組に作業委託した。
- 5 整理作業及び報告書作成にかかる作業は、平成13年度に実施し埋文事業団調査課職員・嘱託員がこれにあたった。
- 6 出土遺物と調査に関する資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。遺物の注記記号は「イワ」とし、出土地点や層位を併記した。
- 7 本書中の挿図・図版で示す方位は、すべて真北である。
- 8 引用・参考文献は著者及び発行年(西暦)を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 本書に掲載した遺物の番号は土器・陶磁器・金属製品・石製品・土製品・木製品でそれぞれ通し番号を付け、図面図版・写真図版・観察表の番号は一致している。
- 10 本書の執筆は山本　肇(埋文事業団調査課主査)、小野塙徹夫(同　主任調査員)、本間克成(同)が担当し、下記のとおり執筆分担した。総集は山本、高橋が行った。執筆の分担は以下のとおりである。

第Ⅱ章2 第Ⅲ章3 第Ⅳ章1～5	第Ⅴ章1A, D 第VI章	・・・・	山本、高橋
第Ⅰ章	第Ⅲ章1、2 第V章1B	・・・・・	小野塙
第Ⅱ章1 第IV章6	第V章1C	・・・・・	本間
- 11 岩倉遺跡の遺構・遺物の概要については『埋文にいた』『第9回 報告会資料』『年報』に記載があるが、本報告書との間に齟齬がある場合は、本報告をもって正とする。
- 12 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から多くの御指導・御助言を賜った。ここに厚くお礼申し上げる。(敬称略　五十音順)

相羽重徳	安藤正美	池田　亨	伊藤敏雄	井上慶隆	金子拓男
木島　勉	小林昌二	斎藤　進	榎　守夫	鈴木郁夫	関根慎二
竹之内　耕	館野和巳	長　圓美	土田孝雄	鶴巻康志	伴　美津恵
丸山活龍	水澤幸一	宮田進一	山川資郎	山岸洋一	吉原義則
渡辺ますみ	和田　護	糸魚川市教育委員会	糸魚川市都市整備課	梶屋敷区民会館	
西日本旅客鉄道株式会社糸魚川駅		大和川公民館			

目 次

第Ⅰ章 序 説.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査と整理体制.....	2
A 調査体制.....	2
B 整理体制.....	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	3
1 地理的環境.....	3
2 歴史的環境.....	6
第Ⅲ章 調査の概要.....	9
1 一次調査.....	9
2 二次調査.....	10
A 調査方法.....	10
B 調査の経過.....	11
3 層序.....	12
第Ⅳ章 遺 構	13
1 磚石建物跡.....	13
2 方形区画遺構.....	13
3 溝.....	14
4 竹管遺構.....	14
5 その他.....	14
6 泥濘原.....	15
第Ⅴ章 遺 物	16
1 中・近世.....	16
A 陶磁器類.....	16
B 木製品.....	17
C 金属製品.....	20
D 土製品、石製品.....	21

2 その他の時代	21
----------	----

第VI章 まとめ.....22

1 遺構について.....	22
A 方形区画遺構.....	22
B 磚石建物.....	22
2 遺物について.....	22
《要 約》.....	24
《引用文献》.....	24

挿図目次

第1図 遺跡位置図.....	4	第8図 調査地区剖面.....	11
第2図 遺跡周辺の地形.....	5	第9図 土層柱状図.....	12
第3図 周辺の遺跡分布図.....	6	第10図 磚石柱穴構築模式図.....	13
第4図 周辺遺跡出土遺物実測図.....	7	第11図 V字層(泥炭層)分布図.....	15
第5図 田伏、祇園敷地区地籍図.....	8	第12図 泥炭原の状況写真.....	15
第6図 一次調査トレーナー設定図.....	9	第13図 木簡実測図及び写真.....	18
第7図 グリッド設定図.....	10		

表目次

第1表 烧山火山の活動史.....	3	別表2 金属製品観察表.....	28
第2表 方形区画遺構一覧.....	13	別表3 銭貨一覧表.....	28
別表1 陶磁器類観察表.....	25	別表4 木製品観察表.....	29

図版目次

[図面図版]

図版1 遺構全体図	図版8 遺物実測図(3) 陶磁器
図版2 遺構分剖図(1)	図版9 遺物実測図(4) 陶磁器
図版3 遺構分剖図(2)	図版10 遺物実測図(5) 木製品
図版4 遺構断面図	図版11 遺物実測図(6) 木製品
図版5 竹管遺構実測図	図版12 遺物実測図(7) 金属製品
図版6 遺物実測図(1) 陶磁器	図版13 遺物実測図(8) 銭貨拓影図
図版7 遺物実測図(2) 陶磁器	図版14 遺物実測図(9) 土製品、石製品等

[写真図版]

- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 図版 15 遺跡付近空中写真 (1947) | 図版 24 遺物写真 (陶磁器) (1) |
| 図版 16 遺跡遠景 | 図版 25 遺物写真 (陶磁器) (2) |
| 図版 17 遺跡遠景、遺跡充填状況 | 図版 26 遺物写真 (陶磁器) (3) |
| 図版 18 遺跡空中写真 | 図版 27 遺物写真 (木製品) (1) |
| 図版 19 方形区画遺構 | 図版 28 遺物写真 (木製品) (2) |
| 図版 20 方形区画遺構 | 図版 29 遺物写真 (金属製品) |
| 図版 21 碓石建物跡 (SB21) | 図版 30 遺物写真 (金属製品・土製品・石製品) |
| 図版 22 竹管道構 | 図版 31 遺物写真 (鉄貨) |
| 図版 23 土層写真他 | |

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

西頃城の西部地域では、北アルプスから続く山地・丘陵が日本海へ急激に高度を下げるため、その変化にとんだ地形は美しい景観を作り出すと共に、そこに住む人々の生活に大きく影響を与えていた。

糸魚川は、古代より北陸道の離所といわれた親不知・子不知がすぐ西に位置し、また「塙の道」として知られる松本街道の日本海側の基点として、古くから交通の要所として栄えてきた。それも周辺の自然地形がもたらした恩恵のひとつであろう。現在でも同地内を通過する国道8号は、北陸自動車道と共に、関西・北陸地方と北越地方を結ぶ主要幹線である。また、地元においては、山地と海岸を結び、南北に延びる道路を東西方向に連結・連絡する、重要な生活道路としての役割を担ってきた。

しかし、近年の自動車交通量の増加は通勤・通学時間帯を中心に糸魚川周辺地域で慢性的な渋滞を引き起こしている。地元でも渋滞の解消や、交通安全の確保を含めた交通環境の改善策を求めていた。建設省（現国土交通省、以下国土交通省）はその状況を踏まえて、糸魚川東地区の交通混雑の解消と幹線ネットワークの充実と強化を目的に、国道8号糸魚川東バイパス建設を平成元年に事業化した。事業区間は、糸魚川市間脇から同市押上に至る6.9kmである。

国土交通省と新潟県教育委員会（以下、県教委）は計画予定地内において、事前に埋蔵文化財の調査を実施するために協議を重ねた。国土交通省から調査依頼を受けた県教委は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を再委託した。埋文事業団は平成11年10月13・14日に予定法線内を中心に分布調査を実施して、地表の遺物の採集に努めた。その結果、糸魚川市大字尾屋敷字葉師堂ほかの地点で数点の遺物を採集し、遺跡の推定地として県教委に報告した。遺跡推定地での一次調査が必要とされたため、国土交通省から依頼を受けた県教委は再び調査を埋文事業団に委託し、平成12年6月5日～9日、12日～14日の計8日間で一次調査を実施した。調査対象面積は、未買収地11,250m²を含めて35,000m²である。調査の結果、中世～近世の陶磁器やかわらけなどの土器、硯、用途不明の木製品などが出土し、中世の包含層が確認された。本線部分の5,350m²が二次調査の対象とされ、取付け道路部分の1,500m²及び丘陵部分の6,000m²については、用地買収後一次調査を実施しその結果を待つことになった。遺跡名は岩倉遺跡とし、遺跡の周知化の手続きが執られた。

その後、国土交通省と県教委・埋文事業団は協議を重ね、平成13年度当初から二次調査を実施することになった。調査対象区域は旧は場の上に盛土され、住宅、公民館等の建造物があったが、平成12年度中に住宅基礎等の撤去も完了し、更地になっていた。しかし、調査対象区北縁の市道にガス・水道管、老朽工業用水管、光ケーブルが埋設されていたため当初の発掘予定地から除外する部分もあり、調査面積は約4,700m²となつた。

二次調査は4月に開始した。調査地区の中央を走る南北の市道、及び付帯する電柱、水道管の撤去が選れたこともあったが、関係各機関や地元の方々の協力により9月末には現場調査を終了した。なお、取り扱いが未確定であった取付け道路部分の1,500m²の一次調査も実施し、その結果から二次調査は要しないと判断された。また、調査予定区内ではあったが、西側の丘陵斜面についても再度トレンチを入れて試掘

をした結果、遺跡の延びが認められず、斜面部分の全面発掘は実施しなかった。

2 調査と整理体制

A 調査体制

発掘調査は一次調査を平成12年度に行い、平成13年度に二次調査を実施した。

[一次調査 平成12年度]

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 野本 寛雄）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 須田 益輝（事務局長）

管理 長谷川司郎（総務課長）

庶務 椎谷 久雄（総務課主任）

調査総括 戸根与八郎（調査課長）

調査指導 高橋 保（調査課建設省担当課長代理）

調査担当 小田由美子（調査課主任調査員）

調査職員 後藤 孝（調査課主任調査員）

[二次調査 平成13年度]

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越鞠一）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 須田 益輝（事務局長）

管理 長谷川司郎（総務課長）

庶務 椎谷 久雄（総務課主任）

調査総括 囲木 郁栄（調査課長）

調査指導 高橋 保（調査課国土交通省担当課長代理）

調査担当 山本 琴（調査課主査）

調査職員 小野塚徹夫（調査課主任調査員） 本間 克成（同 主任調査員）

B 整理体制

出土遺物量は土器・陶磁器・木製品・金属製品等がコンテナ浅箱で28箱で、これらの遺物は現地で水洗・注記までを行った。分類・実測以降の整理作業は、埋文事業団において平成13年10月～平成14年3月末まで調査課職員・嘱託員が行った。

[平成13年度]

整理主体、総括、管理、庶務、整理総括、整理指導、担当、職員は平成13年度調査体制と同じ。

作業 小山たか子 廣野 澄 田辺恵美子（以上、嘱託員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

岩倉遺跡は、新潟県南西部に当たる糸魚川・西頃城地域に位置する。西の富山県、南の長野県との境界には標高2,500m級の飛騨山脈が連なり、その北端は親不知・子不知の断崖で日本海に落ち込んでいる。南東部には焼山をはじめとする標高2,000m級の妙高山地及び西頃城山地がほぼ東西方向に走り、その北部には鉢ヶ岳(1,316m)が位置している。これらの山地から姫川・早川・名立川などの急流河川が北流し、その下流や河口付近には数段の河成段丘や河成・海成低地が形成されている。岩倉遺跡は早川河口左岸、海岸線から約300m内陸に位置し、標高約10mである。

新潟県南西部は、日本列島を大きく二分するフォッサマグナを含む地域で、地質的にみると極めて複雑である。フォッサマグナとは本州中央部を南北に横断する大構造帯であり、これによって東北日本と西南日本とに分けられている。フォッサマグナの西縁を画するのが糸魚川一静岡構造線である。これは新潟県糸魚川市から姫川上流に向かい、長野県松本盆地・諏訪盆地・山梨県甲府盆地西縁を通って静岡県静岡市に達する大断層であり、その大半が活断層である。特に、松本市付近の牛伏寺断層は、近い将来M8.0クラスの直下型大地震の発生が心配されているなど活動度の高い断層である。

糸魚川一静岡構造線以西の西南日本は、日本列島の骨格を構成している古・中生代の堆積岩・変成岩類か

地 層		活動の内容
第4期	新燃火砕堆積物	噴気活動 1974
		水蒸気爆発 1962-3
		1949
	KG-a火山灰層	イオク噴出(1852) 最新のマグマ噴火(1773) (火山灰・火砕流の噴出)
完新世	円頂丘溶岩流	溶岩円頂丘の形成 (中世, 1361年)
		大谷火砕流堆積物 I
	KG-b火山灰層	火山灰・火砕流の噴出
第2期	坊々抱岩溶岩流 一ノ倉溶岩流	焼山最大規模の火山灰・火砕流・溶岩流の噴出 (平安時代, 887年?, 989年?)
		前山溶岩流
	早川火砕流堆積物 KG-c火山灰層	
第1期	KG-d火山灰層 真川溶岩流	火山灰・火砕流・溶岩流の噴出
		焼山火砕流堆積物
	前川土石礫堆積物 KG-e火山灰層	火山活動の開始(約3,000年前)

第1表 焼山火山の活動史 * 早津[1994] より抜粋

らなるのに対して、構造線以東の東北日本は地質時代の新しい新生代第三紀・第四紀の堆積岩類・火成岩類から構成されている。岩倉遺跡は構造線の東側に当たり、完新統からなる低地に位置している。遺跡周辺の早川沿いには、新第三系からなる丘陵がある。当然のことながら、構造線以西の黒姫山・明星山は古生代石炭紀～ペルム紀の石灰岩・ヒスイを含有する岩石などから構成されており、石灰岩は採掘対象とされている。近年建設された糸魚川市のフォッサマグナミュージアム、青海町の自然史博物館などは、このような複雑な地質学的背景のもとに設置されたのである。

次に、現在でも活動を続いている焼山(2,400m)について、早津[1994]



にしたがって記載する。焼山火山は、基盤の新第三系のつくる西頸城山地の標高約2,000mの浸食平坦面(高位面)の上に噴出したものである。噴出物は、やや粘性度の低い溶岩流と粘性度の高い溶岩、それに火碎流が主体であり、降下テフラは比較的少ないのが特徴である。焼山火山の噴火史は、第1期～第4期までの4つの時期に分けられている(第1表)。

第1期は、焼山火山の最初の活動と言われており、噴出物の最下位の地層である前川土石流に埋積された形で、直径0.1～1.4mの多数のブナの大木が、基盤に根を下ろした状態で発見されている。この埋もれた木の¹⁴C年代測定が実施されており、3,060±85y.B.P. [新潟大学研究グループ1976]、3,330±100y.B.P. [Gak-10569]、あるいは2,930±110y.B.P. [Gak-10570] [後二者は、早津1985]などの測定結果が報告されている。したがって、焼山火山の活動は、おむね約3,000年前頃にはじまると推定される。なお、前川土石流堆積物の上位にある考古遺物は、岩倉遺跡より約1km南方にある立ノ内遺跡 [高橋ほか1988] で出土した縄文時代晚期最末期の土器（浮線文系の深鉢）であり、考古学的にも矛盾しない。

第2期は、約1,000年前の平安時代の活動で、焼山火山最大規模の火砕流・溶岩流を噴出した。早川火砕流、前川溶岩流がこれに相当し、地元に残る『伴家文書』・堀口家の『林蔵文庫』・『往古早川谷之絵図』などから、887年、989年の噴火記録に相当するものと考えられている。

第3期は、現在の溶岩円頂丘の形成がなされた活動で、¹⁴C年代値、考古学的資料〔高橋ほか1988〕や文書などから、1361年の古記録に対応する活動と見なされている。噴出物としては、大谷火砕流堆積物Ⅰ、山頂を形成した溶岩円頂丘である。

第4期は、溶岩円頂丘形成後、現在までの活動を指している。焼山火山最新のマグマ噴火は大谷火砕流堆積物Ⅱであり、これは1773年の噴火記録と対応すると考えられている。このときの激しい噴火によって、山西火口「御駒」が形成されたものと考えられている。

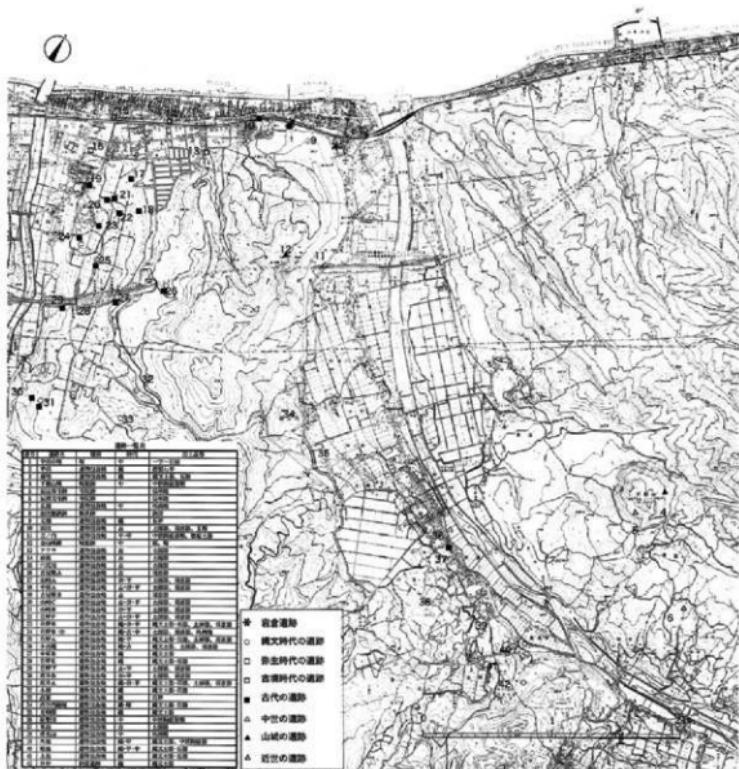
上流にこのような活動的な火山をもつ早川は、岩屑供給量が過剰となるため河口付近でも直径数mの巨礫が見られ、水害による被害も多い。岩倉遺跡周辺の水田には、早川の氾濫洪水によって運ばれたと思わ



れる巨礫の上に小さな祠が作られ、水神様を祀っている。また、遺跡の中にも現河床にあるような角の取れた砂礫が堆積している。礫は火山起源のものが多く、やはり早川の氾濫洪水によって運ばれてきたものと考えられる。礫のインプレッションや砂層のラミナ、遺跡地形面の傾きから、南東から北西方向に流下してきたものと推察している。

2 歴史的環境

早川に面した流域では、縄文時代の遺跡は少ないが、岩倉遺跡の上流新町の清水山付近に縄文時代の遺跡が認められる。地形的にもやや高くなっている部分である。その下流域の平野部では、縄文遺跡はほとんど確認されていないが、早川右岸の下早川の丘陵上にはいくつか縄文遺跡がある(39~42)。40の細池遺跡は縄文晩期の遺跡で、昭和47年に市教育委員会によって発掘調査が行われている。ここでは、硬玉製の玉類や工具類が出土している。早川流域は、焼山火山の火砕流流下地域のため、たびたび火砕流により埋



第3図 周辺の遺跡分布図
(糸魚川市役所「糸魚川都市計画図」1:10,000原図 平成7年発行)

没した所で、新しくは江戸時代の1773年にも噴火記録があり、低い部分に存在したであろう縄文時代遺跡は、埋没してしまった可能性がある。ただ、金山城のある丘陵の先端部には丈畠遺跡があり、縄文時代の石斧が採集されている。金山城のある丘陵を隔てた海川流域では、右岸の段丘上にいくつかの縄文遺跡がある。28の岩野E遺跡は、北陸自動車道建設に伴って県教委が発掘調査した遺跡である。縄文時代早期末の条痕文系土器が出土している。25の岩野A遺跡は、昭和56年に市教育委員会が発掘調査した遺跡で、縄文前期の土器、石器、玦状耳飾りが出土し、また奈良平安時代の土器も出土している。弥生時代の遺跡は、この地域では皆無と言ってよい。立ノ内遺跡(11)では弥生初期の浮線文系土器が出土している。古墳時代の遺跡も明確でないが、岩倉遺跡には当該期と考えられる土器、紡錘車が出土している。また、田伏遺跡(10)は、玉作遺跡として有名である。昭和45年に市教育委員会が発掘調査を行っており、土器のほかに、子持ち勾玉、各種玉類、硬玉原石が出土している。古代になると遺跡数は急増する。特に海川右岸の段丘上に顯著である。県教育委員会が北陸道建設に伴って発掘調査した小出越遺跡(26)、岩野下遺跡(29)等がある。

中世になると、城館跡関連の遺跡が認められる。早川流域で最大規模の不動山城(4)が右岸にある。この早川谷は、他地域に抜けるルートとなっていたいなかったと見えて、これより上流に城跡は存在しない。この城は独立した円錐形の山塊に築かれた山城で、早川流域一帯を眺望でき、勝山城・根知城等を視界に入れることができる。戦国期の城で、上杉家譜代の家臣として仕えた山本寺氏の居城と伝えられている。付近には城館に関連する地名が多く残っており、「本丸、二の丸、ダイガミネ(代官面)、烽火場、大倉、千人溜、倉屋敷、御殿跡、倉跡、鎧研場、人切場、土蔵屋敷」等がある。南側には要害と呼ばれる集落があり、ここには「御殿屋敷跡」と呼ばれている場所も存在し、井戸跡からは椀・膳の破片が多く出土したと伝えられている。この不動山城の支城とされるのが、市指定史跡金山城(12)である。金山城は、位置的には海岸ルートを見下ろす位置にあり、糸魚川市街地を一望できる。この城の麓にあるのが立ノ内遺跡であり、今回の岩倉遺跡である。立ノ内遺跡では、大規模な掘立柱建物が整然と見つかっており、礎等はないものの多くに居館跡的であるが、寺院跡ではないかとの意見もある。また、7の正面遺跡では、珠洲焼が採集されているが、中世の屋敷や集落跡は立ノ内遺跡を除いて明確でない。

第4図は、周辺遺跡出土遺物である。1・2は大和川の山崎A遺跡採集の須恵器である。1は高台杯である。2は甕体部で、いずれも平安時代に当たる。3・4は、東海の居村で採集した土器である。3は瓦質土器の口縁部である。全面黒色で、外面に型押しの文様がある。火鉢であろう。4は把手または脚部と考えられる。3・4ともに近世であろう。第5図は、明治4・5年頃作成された地籍図をつないだものである。図面上が日本海、右側に早川が北流し、日本海に注いでいる。スクリントーンは、山地・畑地・水田を表しているが、水田部分は早川・施川の氾濫原であったことが、水田・道・水路等の方向から想定できる。調査した地区は、字岩倉であるが、山裾には字棚田があり、現在も山裾に残っている段々水田と一致する。

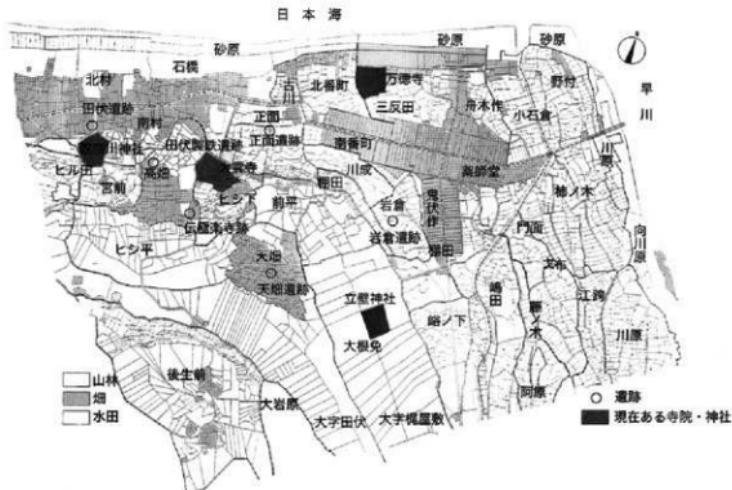


第4図 周辺の遺跡出土遺物実測図

発掘調査区の岩倉も氾濫原であったと考えられるが、調査結果でも近世以降の氾濫による疊層が確認されている。また、岩倉の北西隣には宇川成の地名も残る。

現在の梶屋敷地区は、小口を道路に向けた町屋が整然と並んでいる。近世北陸道が通っていた所で、梶屋敷には駅があり、宿駅として本陣も存在した。特に加賀藩の参勤交代においては、重要な位置を占めていたと考えられる。

さて、当地の寺社としては、大雲寺・万徳寺・奴奈川神社・立壁神社がある。大雲寺は、現在の田伏地区にある。過去帳から、開山は慶長年間から元和年間（17世紀初め）で、現在の東頸城郡浦川原村にある願聖寺の末寺として建立されたことがわかる。寺の南側には伝極楽寺跡があり、そこからは東頸城郡に分布する板碑と同様なものが出土しており、寺は当初から現在地にあった可能性が高い。一方梶屋敷地区で最も古いとされる万徳寺は、明応2年（1493）に加賀國から移り、当初は堂のみの寺であった。その後、天文6年（1567）に東本願寺から寺号を授かり、別の地に移ったと伝えられている。現在も万徳寺には東本願寺からの慶長年間の書状が残されており、「いといがわ かじやしき 万徳寺」の記載がある。したがって、寺号を授かってからは、地籍図にある現在地に存在したと考えられる。



第5図 田伏、梶屋敷地区地籍図

第III章 調査の概要

1 一 次 調 査

平成11年に実施した分布調査の結果、遺物が地表で採集され、遺跡の推定地とされた道路予定法線内について一次調査を実施した。調査期間は平成12年6月5日～9日、12日～14日の計8日間である。調査対象面積は35,000m²で、その内実際にトレンチで掘削した実質調査面積は410m²である。

調査対象地区内の任意の位置に試掘トレンチを設定し、バックホーを使って徐々に掘り下げ、遺構と遺物の検出、発見に努めた。なお、調査地区は旧住宅地であり、建造物の上屋はすでに撤去されていたが、基礎が残っていた。そのため試掘トレンチの設定箇所が制限されることがあり、小型の重機での対応となった。また、人力による発掘となつたところもあった。掘削したトレンチは総数で56か所である。

調査の結果、調査区西側の丘陵底部に接する平坦地において、中世から近世初頭までの時期の遺物が出土し、遺物包含層も確認された。遺構が確認できなかったため、遺跡の性格を特定するに至らなかつたが、石甕・火鉢・青磁などが出土し、付近に在地領主居館、寺院跡等の存在の可能性をうかがわせた。ちなみに調査地の南約1kmには中世の立内遺跡があり、近隣の大運寺には中世の板碑がある。遺物、包含層が確認された西側約5,350m²は「岩倉遺跡」として県教委の遺跡台帳に登録し、また二次調査が必要とされた。用地買収が未了のためトレンチが設定できなかつた取付け道路部分の1,500m²、及び西側丘陵斜面部については後日一次調査を実施し、その結果を待つて取り扱いを判断することにした。この調査結果は、平成12年6月に報告した。

なお、二次調査期間内に、取り扱いの未定であつ



第6図 一次調査トレンチ設定図

た取付け道路部分と西側丘陵斜面部に一次調査を実施したが、遺跡の存在は確認できず、同地区では二次調査を実施しなかった。

2 二 次 調 査

A 調 査 方 法

グリッドの設定（第7図）

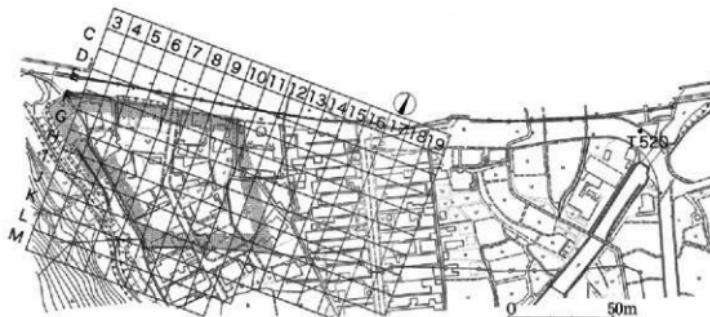
グリッドの設定においては、国土交通省作成の『糸魚川東バイパス基準点網図』他計画図に表記のあるT520（旧座標X:117123.165・Y:-52047.206・H:10.034）を基準点とした。基準点を基に国土座標の方向にあわせたX座標1171, 100, Y座標-52, 320.000のラインを基線として設定し、その交点をグリッドの基点とした。グリッドは10m四方を単位とした大グリッドと、大グリッドを2m四方に25等分した小グリッドの二種類ある。大グリッドの名称は、グリッド基点から東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットを用いて表した。また小グリッドは大グリッドの北西隅を1、南東隅を25として1～25の算用数字で表した。グリッドは「6 H25」のように大グリッドの後に小グリッドをつけて呼称している。

なお、調査区内では大グリッドの南西隅の杭に、各大グリッド名を表記して調査に利用した。

掘削作業

表土から近世の遺物包含層まではバックホーによる掘削を行った。遺物包含層は基本的に移植ゴテ・ミニジョンレンにより人力で掘削したが、遺物の希薄な地点は、ホソ・スコップなども用いた。ただし、Ⅲ区の北側では遺物包含層が深く、また江戸時代以降の水田が深いため、中世、古代の遺物包含層までバックホーで掘削した地点がある。

またⅠ区北側はわずかに遺物は出土するが、包含層は確認できず、人頭大の川原石や粗砂の層が存在した。そのため土層確認を目的に、表土除去の最中にバックホーで深さ約2mほどの深堀りを行った。その結果、該当区域は河川の氾濫原であることが確認された。さらに該当区域内に南北方向の2本のトレーンチ設定し試掘を行ったが、遺構は確認できなかった。



第7図 グリッド設定図

排水溝掘削作業

調査区には疊層が数メートル下に存在したため、矢板の打設に不適であり、安全勾配で調査区周囲を掘削した。しかし、南側や西側の丘陵からの出水などが予想され、全周に暗渠排水を設定することとした。各排水溝の接合隅には集水井を設け、電気配線により24時間稼動可能な排水ポンプを設置した。なお暗渠排水はドレン管を用いず、川砂利のみを排水溝に入れるものとした。

遺構番号

遺構は検出順に一連の番号を付し、番号の前に S K・S D・S X の種別記号を付して表した。SKは土坑、SDは溝、SXは不明遺構を表す。ピットについては番号の前に「P」をつけた。なお、礎石建物については、全体に遺構名(SB)と遺構番号を付して記録している。

B 調査の経過

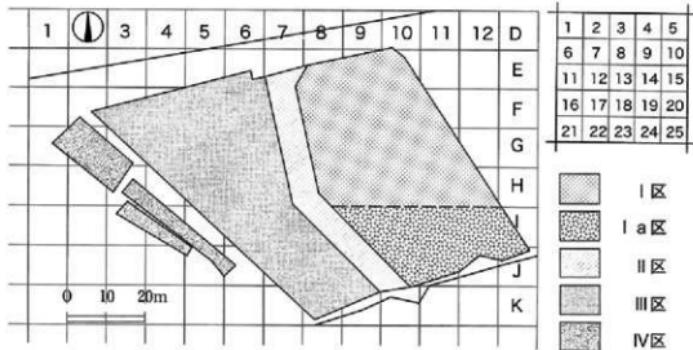
平成12年度の一次調査の結果を踏まえて、関係諸機関内で協議調整を行った結果、二次調査は平成13年度当初から実施することになった。調査期間は平成13年4月16日～10月3日である。二次調査必要面積は5,350m²であったが、老朽水道管や光ケーブル等の埋設された調査区北縁の市道や、西側丘陵斜面が最終的に調査から除外されたため、実質調査面積は約4,700m²となった。

平成13年3月には関係諸機関、地元関係者との打合せを行いながら調査の準備に入った。3月19日～28日にかけて国土交通省によって調査地区内の宅地造成時の盛土が除去された。

4月9日にはブレハブに器材を搬入し、暗渠排水工事を開始した。4月19日からバックホーによる表土掘削を開始し、4月23日には作業員による本格的な発掘を始めた。

調査区は便宜的に、全体を4地区に分割(第8図)して調査を進めた。調査区中央の市道下のII区、市道東側のI区、市道西側のIII区、西側丘陵斜面のIV区である。I区の南側は、市道切り回し道路の建設のために先行調査になり6月9日に国土交通省に引渡しを行った。その後I・III区の調査を平行して進めた。II区については、市道の切り回し道路完成後に調査を実施するため、やや調査開始が遅れたが、関係諸機関の協力により8月中旬から発掘を開始できた。

9月初旬には最後まで残っていたIII区周辺の遺構処理もほぼ完了し、19日には県教委が調査終了の確認



第8図 調査地区割図

を行った。22日には空撮を実施した。翌23日には、地元を対象に現地説明会を行い約110名の参加があつた。その後、残っていた礎石建物の記録や遺構実測を完了した。同時にプレハブ周辺の片付け、関係諸機関と地元関係者への挨拶を済ませ、9月27日には現場調査を終了した。

その後、12月に現地で周辺の寺院などの補足調査を行った。

3 層 序

岩倉遺跡は15世紀から17世紀まで断続的に営まれた遺跡である。遺跡からは、古墳時代後期（6世紀）・古代（9～10世紀）・中世（13～16世紀）の遺物が同一の層位から出土した。地形的には、山裾部分にあたる西側に向かってなだらかに傾斜し、また上流部に当たる南側から北に向かったなだらかな傾斜となる。基本層序は、以下のとおりである。

I層：旧表土 水田耕作土である。

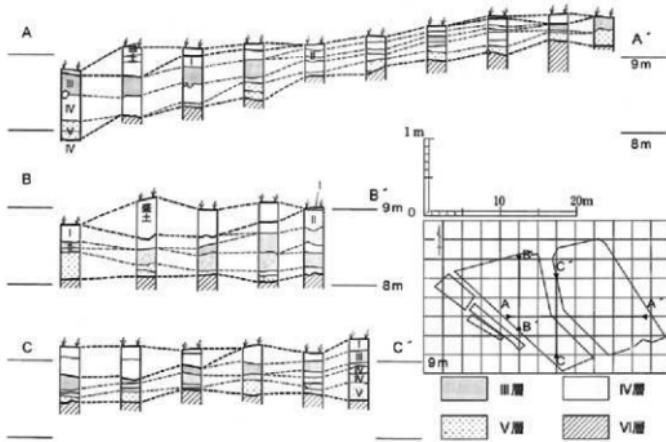
II層：灰黄褐色土 水田底土である。鉄分をやや多く含む。

III層：灰黄褐色シルト（遺物包含層） しまり、粘性とともに強く、炭化物を多く含む。

IV層：褐灰色シルト（遺物包含層） やや砂を含む。しまり、粘性とともに強く、炭化物を多く含む。

V層：灰色砂層（洪水堆積土） 3層に分層される。V a層：粘質土層、V b層：小砾層、V c層：砂層

VII層：青灰色シルト（地山）



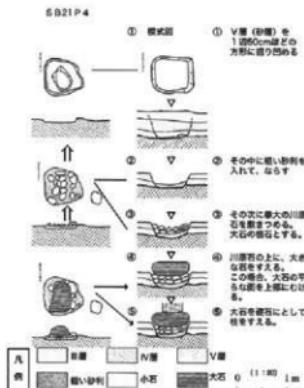
第9図 土屢柱状図

第IV章 遺構

検出された遺構は、中世から近世にかけての礎石建物・方形区画遺構が主なもので、他に溝・土坑・ピット等がある。

1 磚石建物跡 (SB21)

調査区の一番南側、8・9-J・K区に位置する 2×3 間の鉢柱の建物である(図版3・21)。方形区画遺構と重複するが、方形区画遺構の埋土の上に建物が構築されていることから、建物の方が新しいことがわかる。ほぼ南北方向を示すが、やや西に傾く。南北桁行約8.6m、東西梁間約7mとなる。面積は約60m²(36畳)である。柱間隔はP1-P2、P3-P4で約3mであるが、P2-P3では、約2.8mと狭い。東西の柱間は、P4-P5等で約4mであるが、P9-P10、P5-P6のみやや狭く約3.5mとなる。礎石が残存しているのは、P3・4のみで、他は存在しない。P3の礎石は、長さ75cm、幅50cm、厚さ30cmの河原石で、加工は施されていない。建物の長軸方向に、石の軸も合わせている。礎石穴の掘形は方形で、 1×1.5 mと大きい。下には10~20cm前後の川原石が根石として敷き詰められている。P4の礎石は長さ60cm、幅40cm、厚さ20cmの川原石である。やはり長い方を建物の長軸に合わせている。掘形は70cmの方形である。下部には根石が敷かれる。第10回模式図にあるように、根石の下には、粗い砂が敷かれている。他の柱穴には、根石が一部残存しているのみである。掘形はまちまちである。



第10回 磚石柱穴構築模式図

2 方形区画遺構

方形区画遺構は、調査区の西側山裾に沿つて、2から3列整然と検出された(図版2・3・18~20)。調査区の中では、検出面が、最も深かった部分である。山裾の後背湿地に当たる部分で、現在の土地利用も水田や荒地になっていく部分である。近くを流れる姥川が、この山裾を通っていたことも考えられる。

番号	形態	規格 長軸	規格 短軸	深さ	備考
S X09	(方形)	973	(1005)	24	
S X19	(方形)	917	(858)	27	
S X22	不整形	804	874	21	
S X23	不整形	958	870	23	
S X24	(長方形)	(885)	(1042)	13	
S X25	(長方形)	1038	(772)	14	
S X26	長方形	740	1062	31	
S X28	(方形)	(668)	(913)	28	
S X29	(長方形)	713	(425)	18	
S X30	不整形	(752)	(1648)	32	鉄鏃(図版12・16)出土
S X31	(長方形)	(376)	(867)	38	鉄鏃(図版12・22)出土
S X71	不整形	1357	645	不明	

今回検出された方形区画遺構は、当遺跡最下

第2表 方形区画遺構一覧

層であり、出土している遺物から15世紀代が考えられる。地形的には、地形にそって南東側から南西側に

なだらかに傾斜しており、方形区画も段々となっている。そのため、上流側の方が彫り込みが大きくなっている。また、東西方向でも東側が高く、西側が低くなっている。区画は傾斜方向に直交するように区画されている。規模はS X23で9.6m×8.7mで、山側の列の方が、やや大きい区画となっている。深さは20~30cmと浅い。上流側は2列であるが、下流側S X29では3列、その下はS X30で1列である。しかし、東西幅は同じで、規制があったことがうかがえる。

覆土はV層の灰色砂層（洪堆積土）である。区画と区画との間には30cmほどの間隔があり、畦や道として機能していたと考えられる。S X09・S X19・S X17・S X28では、南側（上流側）掘り込み部に径5cmほどの自然木の杭が30cm間隔で打ち込まれている。上流側にのみ認められることから、土留めの機能を果たしたと理解される。S X17東側では、掘り込み部に沿って深い穴が認められた。杭の痕跡であろうか。

3 溝

S D27 (図版2・18)

S X26の北側に沿って走る溝でS X17南東角に接続している。長さ約10m、幅2~2.5mで、東側で細くなつて立ち上がる。断面浅い皿状で深さは約20cmである。覆土はV b層。S X17に向かって緩く傾斜しており、S X17と何らかの関連のある溝かもしれない。

S D56 (図版2・18)

S D27と交差する溝である。長さ7.7m、幅1.5mで北側で細くなつて立ち上がる。方形区画と方向を同じくする。断面はU字状を呈し、深さは約20cm、覆土は褐色土である。性格不明。

S D34 (図版1・22)

4 G区で検出した溝。V b層上面で確認された。幅20cm、長さは2.7mで、ほぼ東西に走る。断面U字状で、覆土は暗褐色土。図版14-21の底石が出土している。

4 竹管遺構

III区の中央金山丘陵の際から北に向って、直線で検出された（図版5・22）。南側の延長方向には現在山際に横井戸があり、北側は梶屋敷の集落に向って延びている。遺構の掘り込みは盛り土除去後のII層である。

直径10cmほどの孟宗竹を使用しており、節の内側は丁寧に削られている。地元の吉原義則氏（梶屋敷在住）の話では、以前は竹を水道管などに利用したとのことである。節は、ある程度節をくりぬいた竹の中に水を入れ、高いところで竹を垂直に持ち、大きく上下に振ると中の水の重さで残っていた節もきれいに抜けたという。ジョイント部分は杉の角材を四半分に裁断し、それを竹の径に合わせて、削りぬき、そこに竹の管を差し込んでいる。ジョイント間の長さは約9mである。地面上には竹の管よりやや広めに溝を掘り、ジョイント部分には、特に粘質土を入れ、水が竹管から漏れないように工夫している。

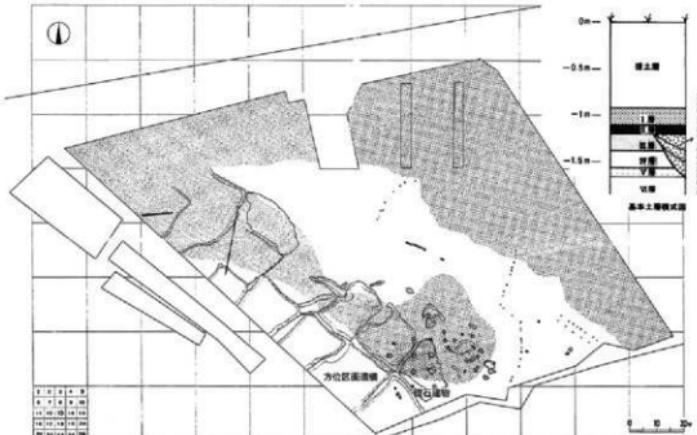
5 その他

不整形の土坑（S X44・S X55・S X66）があるが、人為的なものかどうか判断がつかない。また、石の詰まったピットもいくつかあるが、礎石のピットの可能性もある。（図版23）

6 沼澤原

遺跡の中には、現河床で見られるような角の取れた砂礫（Vb層）が広く帶状に分布している（第11・12図）。礫は火山起源のものが多く、長径10~20cmを中心に長径50~80cmを含み、人頭大のものも多く含まれている。これは地理的環境でも前述したように、早川の洪水氾濫により南東から北西方向に流下し堆積したものと推察している。

砂礫層の多くは、IV層包含層直下のV層として堆積している。場所によっては包含層がなく、盛土やII層の下に堆積しているところもある。特に調査区北・東側では包含層がなく、この砂礫層が厚く堆積し地盤は認められなかった。調査区西側にある方形区画造構も、この砂礫層で埋め尽くされていた。砂礫層は場所によって、砂質分の多い区域と礫の多い区域がある。洪水の本流が流れた区域には粒径の大きな礫（Vb層）が、水をかぶった程度で滞水した区域には砂（Vc層）または泥（Va層）が堆積したのではないかと考えている。



第11図 Vb層（沼澤原）分布図



第12図 沼澤原の状況写真（左Ⅰ区北側、右Ⅲ区北側）

第V章 遺 物

出土遺物は、中近世陶磁器類を中心として、木製品・金属製品等が出土している。また、古墳時代、古代の土器も若干出土している。ほとんどが包含層からの出土である。

I 中・近世

A 陶 磁 器 類

青 磁 (図版6 1~13)

碗 (1~7) 1・2は外面に錦ぎ連弁を持つ。1は連弁が断面三角形状を呈するが、2は深い沈線によっている。また内面にも文様が見られる。4は連弁が細かく、形態化している。3は内面に文様が認められる。5~7は無文である。

皿 (8~9) 9は波状口縁になるとされる。内面に波状の文様がある。8は底部である。

盤 (10~12) 10は大型である。内面には波状の文様がある。11・12はともに口縁部にくびれのあるものである。11では内外面に文様がある。

香炉 (13) 蓋のつく香炉と考えられる。

白 磁 (図版6 14~16)

いずれも小型の皿であろう。

朝 鮮 雜 軸 (図版6 17~21)

いずれも小型の皿である。底部4cm前後と小さく、中心が少し窪むのが特徴である。全面にやや白味がかった軸がかかる。荒いハケが目立つ。

青 花 (図版6 22~31)

碗 (22・23・31) 22・23は端反りの口縁で、外面に唐草文、内面に雷文が配される。31は胎土、文様ともに異なり、福建省方面の産である。

皿 (24~30) いずれも薄手のつくりの細片である。28・29は見込みに十字花文。30は基筒底で見込み、外面ともに文様がある。

染 付 (図版6 32~35)

波佐見系の碗、皿であろう。

珠 潤 烧 (図版6 36~43、図版7 44~65、図版8 66~76)

壺 (36~40) 36は短頸壺。37・38は大型である。39・40は昂目。

甕 (41~46) 41~43が口縁部破片である。41・42は大型。43は薄手である。

底部 (47~51) 47・48が壺、49~51が甕の可能性がある。

すり鉢 (52~76) 口縁部端面が外方にくるもの (52)、ほぼ水平となるもの (55・56)、水平よりやや内面にくるもの (53・54)、断面が細長い三角形となるもの (57~62)、端部が丸くなるもの (63~68) がある。断面三角形となるものと、丸くなるものは口縁内面に波状文がつかが、68については波状文が認められない。

越前 (図版8 77~80)

壺 (77・78) 77は、一応越前としたが、不明。78は信楽にも類似する。

すり鉢 (79・80) 79は外面に鋸歯がかかり、越中瀬戸の可能性もある。

美濃瀬戸 (図版8 81~85)

皿 81は小型の皿である。内外面灰釉。82は口縁やや外反する。高台がつく。

瓶 84は花瓶口縁部である。灰釉

天目 (85) 黒色の釉で底部欠損。

越中瀬戸 (図版8 86~103、図版9 104~106)

碗 (86~90) いずれも鉄釉がかかる。86・87は体部が直立に近い。88はやや開き。89は厚手で浅い。90は天目の底部であろうか。

皿 (91~100) 91は灰釉、92は鉄釉である。93~95は浅い皿で93はひだ皿。96、97は体部直立する。98~100は見込み部に菊印のあるものである。上半不明。

水差し (101) 小型の水差しであろうか。内外面鉄釉。注ぎ口部は短い。

壺 (102・103) 102は鋸歯。103鉄釉である。

匣鉢 (104) 口縁やや内傾する。

底部 (105・106) 器種は明確でない。

肥前系 (図版9 107~121)

鉢 (107・108) 肥前としたが、明確でない。いずれも、折り返し口縁。107は鉄釉、108は灰白色の釉である。

火入れ (111・112) いずれも口縁が直に内傾する。体部にやや膨らみ。鉄釉。

碗 (113) 口縁部直に立ち上がる。灰釉。

皿 (114~120) 114・115は口縁が大きく開く。116~120は、口縁緩やかに立ち上がる。120は見込み胎土目。

瓶 (121) 上半部の破片である。内面に絞りの跡がある。

産地等不明 (図版9 109・122~127)

109は口縁外反しする。体部にやや膨らみ。近代以降の可能性もある。122は珠洲焼に類似した胎土である。器種不明。123は皿である。肥前系とも考えられるが、被熱のため不明。124は薄手の皿で青磁のようでもある。125は赤い焼きで底部糸切。126は硬い焼きの底部。127は瓦質のすり鉢である。

土師質土器 (図版9 128~141)

底部糸切のもの (128~134) と、手づくねのもの (135~141) とに分類される。

瓦質土器 (図版9 142~144)

142・143は大型の火鉢である。144は脚部である。

瓦質土製品 (図版9 145)

人形もしくは把手の一部と考えられる。

B 木製品

木製品は調査区西側、方形区画造構が連なる部分を中心に、包含層、造構覆土から多く出土している。特に、後述する木簡・鳥形・人形・下駄等の遺物は6 I グリッド周辺に出土が集中している。その他の調

査区東部から北部にかけては、包含層内から散在するように出土している状況である。

種類では、挽物などの容器、食事具の箸、服飾具の下駄・櫛、遊戲具の独楽、祭祀具の人形・鳥形、墨書き簡、木簡様木札が出土しているが、その他製品の部材や用途不明の小品也非常に多く、多種多様な構成である。

近世以降の包含層から出土する木製品は、廃棄されたと思われる用途不明の小型木片が多く、挽物の挽等が多少含まれる程度である。その他の木製品のほとんどが中世の包含層、遺構から出土したものと見てよい。また、方形区画遺構のいくつかは周縁に杭列を伴っている。調査区南東部でも杭列が検出されているが、宅地造成以前の水田耕作に伴う比較的新しいものと考えられる。

木器・木製品の形態・技法については『木器集成図録 近畿古代編』・『木器集成図録 近畿原始編』[奈良国立文化財研究所 1985・1993]、『日本民具辞典』[日本民具学会 1997]を参考にしている。

木 間 (図版II 42) 上部山形形状。下部欠損。墨書き文字の記載はあるが、詳細は不明。

木簡状木札 (図版II 40・41、43~46) 幅2~3cm、厚さ0.4~0.7mmの木札である。細部の加工はそれぞれ異っている部分があるが、44を除いて基本的に下部を三角形に削り出している。上部は欠損しているものが多く、遺存部に墨書きの痕跡はない。

鳥 形 (図版II 35・36) 両端を細く加工した36と尾部の欠損した35の2点が出土した。

人 形 (図版II 33-34) 34は頭部のみ遺存しており、頭部抉りと頭部削り出しがやや粗野である。33は頭部の後背に残っている薄板が欠損している。胸部の加工状況から女性の可能性がある。

独 樂 (図版II 37・38) 2点の出土である。38は縱長のものである。鉄製の心棒が欠落し、中心の穴付近には鉄銷が付着している。37は扁平な形状の独楽であり、中心軸を含む約2/3が欠損している。上面には浅い溝が造っている。

下 駄 (図版II 30~32) 30・31は連齒下駄であり、前緒穴が中央に位置するタイプである。30は前緒穴が斜めに穿孔されている。32は歯をつけていないものであり、一見すると「浜下駄」のようであ



(1/1)
第13図 木簡実測図及び写真 (図版II 42)

るが確定はできない。また、長さが12.7cmと小さく、一般的に実際の使用に適する大きさではない。儀礼用のものか、履物ではなく全く別用途のものであった可能性がある。

横櫛 (図版10-10) 1/2が欠損しているが、黒漆塗の良品である。浅葱色を使い、手書きで中央に家紋と、表裏の櫛歯上部に細い飾り線を入れている。

挽物 (図版10-1～5) 1・5は挽である。3は内外面に赤漆を塗った皿で、一部口唇に下塗りの漆が露出している。1は割り出しの高台がついていたが、欠損している。5も同様に割り出し高台付のものであったが、体部と高台のほとんどは欠落し、挽底部のみ遺存している。挽外側は黒漆、内側は赤漆塗である。残っている高台の付根に、一部錐で穿孔された孔がある。4は高台付の合子である。器厚が他に比べて厚く、内外面赤漆塗、高台内側に下塗の黒漆が見える。2は、内面に段を有する。皿であろう。黒漆の上に朱(赤)が塗られている。

箸状木製品 (図版10-7・9) 実測図に挙げたものは2点である。ともに赤漆塗りの箸である。他にも漆は塗られていないが、細長い棒状木片の角を簡易に削り取って箸としたものが多く出土している。

鉄鎌矢柄 (図版10-6) 全面黒漆が塗られている。柄の外側部分の漆がついた部分のみ、1.5mmほどの厚さで管状に残っていた。中心部は腐食して残っていない。図版12-16の鉄鎌が装着されて出土した。(図版22)

籠状木製品 (図版10-21) 先端部はやや幅が広く、厚さも薄くなり籠状になっている。持ち手部分は断面梢円形に成形されている。

木札 (図版10-28・図版11-39) 39は方形状で、錐による穿孔が端部になされ、数条の直線からなる刻印がなされている。紐を孔に通して木札として用いたと考えられる。28は四角形の両端に抉りが入られている。糸巻きに用いられたものと考えられるが、詳細は不明である。

板状木製品 (図版10-11～14・17・19・22～27)

いずれも薄い板状のものであるが、他の製品の部材も含まれていると考えられ、また用途が推定できるものも少ない。25～27は穿孔されていない板で、他のものは1ヵ所または数ヵ所の穿孔が施されている。

26は脇の脚部の可能性がある。19は両端が破損し詳細は不明だが、木口に2ヵ所、木釘が打ち込まれていた。17は一端が三角形状に削られ、他端は凹状に抉りこまれている。中央に1ヵ所、孔が開けられているが、周縁部が磨り減っている。紐を通して用いられていたと考えられるが詳細は不明である。29は2つの孔が並んで開けられ、現在もある紐の長さの調整具と非常によく似ている。24は両端が細く削られ、中央付近に桜樹皮を用いた絹じと誰で開けられた孔が2ヵ所見られる。金具の留孔と考えられ、曲物側板の一部とも考えられる。14は梢円状の薄板で径6mmほどの孔が2ヵ所開けられている。

棒状木製品 (図版10-8・15・16・18) 8は部材と考えられ、先端部が薄く削り出された楔状の角材である。黒漆が部分的に塗布され、先端部は欠損している。18も同様に先端部を薄く加工し、3ヵ所穿孔してある。15は丸めた端部に1ヵ所の穴があり、両端が欠損している。16は両端に偏り2ヵ所ずつ計4ヵ所に錐で孔が開けられている。一端は欠損している。

杭 (図版11-47～60) 数箇所の方形区画遺構の周縁から、列状になって発見された打込み杭の一部を掲載している。48～61の平均の長さは49.6cm、最大径3.5cm、最小径2.6cmである。直径が約2～5cmほどの、杭に適当な枝を選び、先端を簡易な削りで、鋭利に加工している。杭に用いるため、まっすぐの部分を選んで用いてはいるが、中には彎曲したものを使用しているものもある。50・55・61など桜を使用したものは、樹皮が付着したまま残っている。桜のほかにも、比較的年輪のはつきりした杉や、その他の木材も

使われている。杭の上部は破損したり、腐食によって失われている。

C 金 屬 製 品

鎧 (図版12 1) 先端部は幅が広く、薄く尖らせて刃をしている。断面は長方形で、茎は刃部より長く8.5cmある。

小刀 (図版12 2・3・10・17・18・19) 2は刃部が途中で折れているが、ほぼ完存している。刃渡り12.0cm、茎5.7cmで目釘穴はない。18は刃部・茎とともに先端部を欠損しているが、断面が三角形で刃部・峰部ともに明瞭である。茎に直径2mmの目釘穴を有する。3・10・17・19は腐食や鏽により詳細は不明であるが、形状から小刀に分類した。

鞘状金属製品 (図版12 5) 小刀の鞘状で中が空洞になっている。用途不明。

鋼板 (図版12 6) 鋼板であるが用途不明。

鉄鎌 (図版12 7・16) 2つともに有茎の鉄鎌である。7の鎌身部の平面形は、鎌先が広く角の取れた四辺形である。断面は腐食や鏽で判別しづらい。8は茎断面は三角形で、形状から鎌根式と考えられる。16は茎部が木製品の矢柄 (図版10 6) に入った状態で出土し、ほぼ完存している。断面は腐食や鏽により判別しづらいが、先端部と茎部は方形で角根式と考えられる。

小札 (図版12 23) 黒色漆が施された鉄製の小札で、残存状態はかなり良い。3~4mmの円形穴が2×4個穿たれている。

鉛玉 (図版12 24・25・34・35) 35には直径1.5mm、深さ4mmの穴が開いている。

釘 (図版12 8・11・12・14・15) 11・14・15は頭部を折り曲げ、皿部を有する角釘である。8・12は頭部が折損しているが、折り曲げた形状であろう。断面は8・11・12は方形、14・15は長方形である。

楔 (図版12 4・9・13) 13は先端部に向かって細くなっているが、頭部に皿部が認められず分類上楔とした。

馬歛の齒先 (図版12 20) 頭部幅2.4cmで頭部から胴部にかけて約9cmは、断面が長方形で角がしっかりと残っている。それ以下刃先に向かって次第に細くなり、断面は梢円形で角は摩耗により丸くなっている。

鎗 (図版12 21) 唾が一部欠損している他は、ほぼ完存している。鍔は杏葉形に作り二重に透かしを入れ、中央には座金を入れている。小銃は小刻の座を入れ新で止めている。立間壺は四角形で面取りされている。傭・引き手は大きく作られ、断面形は傭が面取りした四角形、引き手は円形である。

鉄鍋 (図版12 22) 底部に3本の足を有する内耳付きの鉄鍋である。ほぼ半分が折損している。口縁部が有段で広がっている。湯口は欠損していて不明。

装飾金具 (図版12 26・36・39) 26・39は銅製品であるが、品名は不明。36は12枚の花弁をもつ菊花状装飾金具で、中央に四角い穴が空いている。

煙管 (図版12 27~33) 27・28・30・31は雁首である。27は刻煙草を詰める火皿部分のみの出土で、金箔が施されている。28は火皿が梢円形で、側面に直径1mmの穴が空いている。29・32は吸口で、33は捻じられている。

笄・簪 (図版12 37・38) 37は笄である。柄には唐草状模様が施されており、下端は折損している。38は二股の脚を有する簪で、上端が耳搔き状に成形されている。

錢貨 (図版13) 錢貨は一覧表のとおり30枚出土している。まとまって出土したものはなく、III・IV層

からばらばらに出土している。初鋤年の古いものは開元通宝(841年 唐)から寛永通宝まである。圧倒的に多いのが北宋銭である。

鉄滓 (図版14 23~31) 十数点出土した。23から27は橢形滓である。29~31は流出滓であろう。28はふいご羽口片である。上部に光沢のある鉄滓が付着する。

D 土製品、石製品

土罐 (図版14 1~16) 1・3は長さ4cm前後、直径5cmとすんぐりした形。2・4~8・11~13は長さ5~6cm、直径4cm前後のものである。8・9はやや小さく長さ4cm前後、直径3cm前後となるものである。14は小さく、また15は6cmと長い。16は外面に釉がかかる。内径が大きく、厚味がなく、他とは区別される。

硯 (図版14 18) 長さ10.5cm、幅3.5、2.6cm、厚さ1.5cmであるが、表、裏面ともに、側落が見られる。磨面部分は陸、海を含めて幅2cm、長さ約8cmである。石質は粘板岩である。

茶臼 (図版14 19) 破片である。筋目の間隔は約0.7cm前後である。砂岩岩。

砾石 (図版14 20・21) 20は、長さ5.7cm、幅2cm、厚さ1.5cmの角柱状で、3面が磨面として使われている。安山岩。全面に炭化物付着。21も3面が磨面として使われている。長さ7.5cm、中央で約2cm角である。部分的に筋跡が認められる。凝灰岩。S D34出土。

2 その他の時代

古墳時代 (図版9 146~148)

土器 146は小型壺の口縁部と思われる。147は小型壺。148は平瓶と考えられる。

筋錘車 (図版14 17) 滑石製。円形、断面半円錐形。直径5.1cm、厚さ1.9cm、中央に直径約1cmの穴が穿たれる。左側にも同様の穴がある。粗い仕上げで、面取りが見られる。

古代 (図版9 149~154)

須恵器 149は瘦胴部。

製塙土器 (150~154) いずれもパケツ状平底の体部破片である。輪積痕が認められ赤化している。

硬玉 (図版14 22) ひすい原石である。

第VI章 まとめ

1 遺構について

A 方形区画遺構

山裾最も深い部分で確認された遺構である。この遺跡としては、古い遺構である。整然と区画されており、水田跡の可能性がもっとも多い。覆土は砂質または砂礫で、水田としては若干の問題点もある。出土遺物の中に、鉄製の轡や馬銚の歯先と考えられるもの、人形・鳥形などの祭祀具もあり、水田耕作に関連のある遺物と考えられる。このような山裾の谷筋を水田として利用することは、現在でも山間部では見られることであり、第5図の地籍図をみても、谷筋はほとんど水田となっている。区画内覆土は、砂質で水田耕作には適していないが、立地、区画規模、形態等から水田跡と考えるのが妥当であろう。

B 磐石建物

磐石建物は、中世までは一般的な建物建築形態ではない。今回の建物も一般的な集落における建物形態とは考えにくい。検出された規模は 2×3 間と規模は小さい。このような規模で可能性として考えられるのは、神社・寺院であろう。付近には奴奈川神社・立壁神社・大雲寺・万徳寺がある。万徳寺は、言い伝えに当初堂のみの寺であったとされ、その後、現在地に移転したとされる。このことから、可能性としては、文献に記載のない寺院・神社・または奴奈川神社・立壁神社・万徳寺の前身等が考えられる。しかし、発掘調査資料からは、断定は困難であり、可能性の段階に留めておく。

2 遺物について

出土した遺物はほとんど包含層のIII・IV層が圧倒的に多く、遺構から出土したものは少ない。

土器類—青磁碗では鎌ぎ連弁の大きいもの(1・2)、内面に文様のあるもの(3)、連弁の小さいもの(4)等があり、上田編年[上田1982]によれば、15から16世紀代の年代が与えられる。白磁もその年代であろうか。青花は、小野編年[小野1982]によれば、23は染付碗B群にあたると考えられる。15世紀代である。皿は24から29が皿B1群、30がC群と思われる。年代はB1がやや古いものの、15世紀後半から16世紀前半である。31は福建省方面の産で、16世紀末から17世紀である。染付(32~35)は、波佐見で17世紀後半から18世紀であろう[中野2000]。珠洲焼は、すり鉢の口縁部形態から言えば14世紀から15世紀(IV期~VI期)である。

越中瀬戸は93のひだ皿の形態、95、96の皿口縁部の特徴から、宮田氏の分類[宮田1997]でおよそ17世紀前半に位置付けられるのではないかと考えられる。

瀬戸美濃は、81、82の皿がその形状から、大窯のI期[藤沢1993]で15世紀後半から16世紀前半に位置付けられる。85の天目も同期であろう。

肥前系陶器の120の皿には胎土目が見られ、I期17世紀前半[船井2000]にあたる。111、112の火入の口縁部形態は、III期17世紀後半の特徴を備えている。

このように出土土器を見ると、15世紀後半～16世紀前半と17世紀前半の大きく2時期を設定することができる。検出遺構と対比すると、下層の方形区画遺構が遺物包含層の下部で確認されていることからこの方形区画遺構が15世紀後半～16世紀前半またはそれ以前、礎石建物跡が17世紀前半とすることができよう。

金属製品のうち、鍋は新潟県内でも出土例が少ない。内耳鍋は、吉川町寺町遺跡 [吉川町教委1995]、上越市子安遺跡 [笛沢1998] で出土している。寺町出土の鍋は形状が岩倉出土とほぼ同形であるが、時期は明確でない。子安では井戸から2個体まとめて出土している。IV期(14世紀後半)の珠洲焼と共に伴している。一つは内耳鍋であるが、脚がつかないものである。胸部と底部の間には梗が認められ、岩倉、寺町とやや形態を異なる。

武具も櫛、小札、鉄鎌とそろって出土している。これらはいずれも、方形区画遺構の覆土及びその上層から出土している。櫛の形態は、栃木県二荒山神社にあるものと同形 [日本中央競馬会1991] である。年代は、14世紀となっている。当遺跡には、中世の建物等が確認されていないことからすれば、上流部からの流れ込みと考えられる。

要 約

- 1 岩倉遺跡は、新潟県の西部、糸魚川市田伏403番地ほかに所在する。早川の左岸、海岸から約300m、標高約10mに所在する。
- 2 調査は、糸魚川東バイパスの建設に先立って、平成13年度に実施した。調査面積は4,700m²である。
- 3 調査の結果、15世紀から17世紀の遺物が検出された。土器は、青磁・白磁・朝鮮軽輪・染付け・珠洲焼・土師質土器等である。金属製品では、轡等。木製品では、木筒・鳥形・人形・下駄等がある。
- 4 遺構としては、一辺10m前後の水田跡と考えられる方形区画遺構がある。下層で確認されていることから15世紀前後の遺構と考えられる。礎石建物は、2×3間で小さい。性格としては、寺院や神社跡の可能性がある。

引 用 文 献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO. 2
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』NO. 2
- 笹沢正史 1998 「子安遺跡」『北陸中世の金銀器』北陸中世考古学研究会
- 鈴木郁夫 1982 「地形分類図」『新潟県上越地域 土地分類基本調査 糸魚川』新潟県
- 高橋 保ほか 1988 「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅲ 立ノ内遺跡」新潟県教育委員会
- 中野雄二 2000 「波佐見」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 新潟大学研究グループ 1976 「地の生いたち」『糸魚川市史Ⅰ』
- 日本中央競馬会 1991 「日本馬具大観 第二巻古代下」日本馬具大観編集委員会
- 早津賛二 1985 「妙高火山群—その地質と活動史—」第一法規出版
- 早津賛二 1994 「新潟焼山火山の活動と年代—歴史時代のマグマ噴火を中心として—」地学雑誌103(2), 149-165
- 藤沢良祐 1993 「大庭期の瀬戸窯業」『瀬戸市史 陶磁史篇四』愛知県瀬戸市
- 船井向洋 2000 「陶器の編年 3、火入・頃」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸」・「越中瀬戸の変遷と分布」『中世の北陸』桂書房
- 吉川町教育委員会 1995 「寺町遺跡第二次発掘調査報告書」

別表1 陶磁器類觀察表

No	出土グリッドと層位	種別	器種	重複部位	残存率(X/16)	法量(cm)		備考(手法等)	
						口	径	底	高
1	H 17 IV	青磁	瓶	体部					(3) 外側擦ぎの施作
2	6 I 3 IV	青磁	瓶	体部					(3.3) 内外濃深い橘式文様
3	7 J 11 IV	青磁	瓶	体部					内側年文
4	7 J 2 IV	青磁	瓶	口縁部	1	16			(4.2) 被熱、細い運舟
5	10 H 5	青磁	瓶	口縁部	2	19			(2.6) 口縁部に細い波線
6	10 I 23 IV	青磁	瓶	口縁部	2	19.2			(3.25) 口縁部沈線、断面漆黒
7	6 G 3 IV	青磁	瓶	体部下半					
8	7 J 17 IV	青磁	皿	底部	16		4.7		(2.3) 被熱、底部タール痕、高台部にも軸
9	10 H 2 IV	青磁	皿	口縁部	2	12.2			(2.4) 内側波状文
10	9 I 1 III	青磁	盤	底部			14		(2.7) 内側文様
11	8 H 15 IV	青磁	盤	口縁部					外側溝井、内側花文
12	9 I 4	青磁	盤	口縁部	2	20			(2.7) 被熱、無紋
13	10 H 12 IV	青磁	青伊?	口縁部	3	8.8			(2.3) 直ぐつく(受け口口跡)
14	7 J 20 IV	白磁	皿	口縁部	2	8.2			(2.4)
15	9 I 1 IV	白磁	皿	口縁部	2	10.6			(1.6) 外側物なし部に横
16	7 I 9 IV	白磁	皿	底部			5.2		(1.2) 見込み部触なし
17	8 J 17 IV	朝鮮無輪	皿	半分	8	10	3.9	2.8	
18	7 I 24 IV	朝鮮無輪	皿	口縁部	3	10			(2)
19	8 H 24 IV	朝鮮無輪	皿	底部			4	(3.8)	見込み跡止
20	6 H 4 IV	朝鮮無輪	皿	体部			5	(2.4)	
21	8 G 24 IV	朝鮮無輪	皿	底部					(2.7) 見込み跡止
22	9 J 22 IV	青花	瓶	口縁部	1	12.8			(2.2) 滾邊口線、外側唐草文、内面口縁部蓄文
23	7 I 24 IV	青花	瓶	口縁部	2	14			(4.4) 嘴口直線、外側唐草文、内面口縁部蓄文
24	7 I 4 IV	青花	皿	8分の1	2	12.4	7	4	外側及び見込み部文様。
25	10 J 8 IV	青花	皿	口縁部	2	13			(2.2) 嘴口直線、外側唐草文
26	9 J 1 IV	青花	皿	口縁部	1	12.8			(1.6)
27	7 K 5 IV	青花	皿	底部					(1.5) 外側直状の茎葉草。
28	7 J 15 IV	青花	皿	底部			5.8	1	外側丹唐草、見込み十字花文
29	8 H 11 IV	青花	皿	底部					(1) 見込み十字花文
30	6 K 1 IV	青花	皿	底部					(1.7) 底部断面直線、茎葉底、外褐色無蓋文
31	5 G 15, 25 IV	青花	瓶	口縁部	1	14.8			(3.9) 福建省、16c末から17c前
32	10 J 25 IV	染付	瓶	半分	5	9.6	4.8	4.9	外側及び底部に文様
33	10 J 4 IV	染付	皿	口縁部	1	14.2			(2.3) 内面二重斜格子
34	8 G 21 IV	染付	皿	口縁部	2	12.4			(2.1) 内面二重斜格子
35	6 I 3 IV	染付	皿	口縁部	3	12			(2.4) 見込み文様
36	7 I 2 IV	珠洲?	壺	口縁部	4	11.2			(2.9)
37	10 H 1 IV	珠洲?	壺	口縁部	3	22			(3.4)
38	7 I 2 IV	珠洲?	壺	口縁部	3	15.8			(4.6)
39	6 H 25 IV	珠洲	壺	体部					八の字状叩き
40	7 I 23 IV	珠洲	壺	体部					
41	8 H 21 IV	珠洲	壺	口縁部	1	24			(5.4)
42	10 H 22 IV	珠洲	壺	口縁部					(6)
43	11 G 7 IV	珠洲	壺	口縁部					(4)
44	10 G 23 IV	珠洲	壺	体部					
45	6 G 18 IV	珠洲	壺	体部					
46	12 H 21 IV	珠洲	壺	体部					
47	8 G 19 IV	珠洲	壺	底部			11		
48	9 H 19 IV	珠洲	壺	底部			13.2	(2)	
49	9 I 18 IV	珠洲	壺	底部			16		
50	11 H 16 IV	珠洲	壺	底部			12.4	(4.5)	
51	11 J 5 IV	珠洲	壺	底部			7.2	(3.1)	
52	9 H 18 IV	珠洲	すり鉢	口縁部	3	32.4			(6.4)

No	出土グリッドと 層位	種 别	器 形	遺存部位	残存率 (1/16)	法 量 (cm)			備考 (手法等)
						口	径	底 径	
53	5 G 25 IV	鉢	すり鉢	口縁部	1	32.8		(5)	
54	7 J 15 IV	鉢	すり鉢	口縁部	1	17		(3.9)	
55	9 G 9 IV	鉢	すり鉢	口縁部	1	20.2		(6.2)	
56	10 H 29 V	鉢	すり鉢	口縁部					片口
57	9 H 4 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
58	7 J 9 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
59	7 I 17 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
60	10 J 2 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
61	6 G 21 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
62	6 I 1 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
63	9 G 15 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
64	6 G 23 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
65	10 I 16 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
66	9 G 17 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
67	10 H 21 IV	鉢	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
68	11 I 14 III	鉢	すり鉢	口縁部					
69	6 I 3 IV	鉢	すり鉢	全体					
70	8 H 5 IV	鉢	すり鉢	全体					
71	9 H 17 IV	鉢	すり鉢	全体					
72	9 G 11 IV	鉢	すり鉢	全体					
73	5 G 24 IV	鉢	すり鉢	全体					
74	10 I 8 IV	鉢	すり鉢	全体					
75	10 I 12 IV	鉢	すり鉢	全体					
76	7 I 17 III	鉢	すり鉢	底部			14	(5.1)	
77	11 J 6 III	壺?	壺	口縁部	2	19.4		(5.5)	よくわからない。14から15?
78	10 H 20 IV	壺?	壺	全体					壺?
79	8 G 14 IV	壺?	壺	全体					外面硝釉?、越中窯戸?
80	7 J 18 IV	壺?	壺	全体					?
81	9 G 24 IV	瓶戸夷道	瓶	口縁部	14	9.3	4.5	3.5	灰釉
82	8 H 20 IV	瓶戸夷道	瓶	口縁部	2	13.2		(2.1)	灰釉、瓶戸?
83	6 I 20 IV	瓶戸夷道	瓶?	口縁部	2	14.8		(2)	灰釉、瓶戸?
84	6 G 1 IV	瓶戸夷道	瓶	口縁部	6	11.8		(8)	灰釉、瓶戸?
85	6 H 24 IV	瓶戸夷道	天目柄	口縁部	1	9.8		(6.2)	黒色鉄物、瓶戸?
86	9 H 12 IV	越中窯戸	瓶	口縁部	2	8.8		(4.1)	鉄物
87	6 I 1 IV	越中窯戸	瓶	口縁部	2	11		(5.6)	鉄物
88	10 I 8 IV	越中窯戸	瓶	口縁部	1	12		(4.9)	鉄物
89	8 H 15 IV	越中窯戸	瓶	口縁部	1	13		(4.5)	鉄物
90	6 H 10 IV	越中窯戸	天目柄?	瓶部			4.4		内面鉄物(茶、墨色まだら)
91	10 I 17 IV	越中窯戸	瓶	瓶部			5.5	2	灰物、足込み物なし
92	8 J 24 III	越中窯戸	瓶	手分	5	16.2	4.4	2.7	鉄物?
93	10 E 7 IV	越中窯戸?	瓶	4分の1	2	11.8	5.2	2.5	鉄物、波口縁、ひだ縁
94	5 F	越中窯戸	瓶	瓶部			5.4	(2.2)	鉄物つけかけ
95	9 J 24 IV	越中窯戸	瓶	口縁部	2	13.4		(2.4)	鉄物
96	7 I 9 IV	越中窯戸	瓶	手分	1	16.6	5	3.2	鉄物、茎筒窓、外画面
97	8 K 1 III	越中窯戸	瓶	手分	7	11	4.6	3.2	鉄物つけかけ
98	6 I 20 IV	越中窯戸	瓶	瓶部			5.5	(1)	足込み有スタンプ、灰物
99	9 I 1 III	越中窯戸	瓶	瓶部			4.6	(1.2)	灰物、足込み物なし、衝印窓、すす鉄熱
100	10 I 23 IV	越中窯戸	瓶	瓶部			5.4	(1.2)	足込み有スタンプ
101	9 I 2 IV	越中窯戸	水度?	全体					ない・外表面鉄物
102	8 K 14 IV	越中窯戸	瓶	口縁部	3	11.6		(4.3)	鉄物
103	6 I 23 IV	越中窯戸	瓶	口縁部	1	11.8		(7.0)	鉄物まだら
104	5 H 20 III	越中窯戸?	?	口縁部	2	10		(5)	鉄物
105	9 G 22 IV	越中窯戸	瓶	底部			12	(4.5)	脚軸系切、諸物

No	出土グリッドと 層位	種 別	部 種	遺存部位	残存率 (X/16)	法 量 (cm)		備考 (手法等)
						口 径	底 径	
106	5 G 24 IV	越中瓢箪	壺	底部			14	回転糸切、踏物
107	4 H 10 IV	肥前系	鉢?	口縁部	2	25.6		上部鉛錠
108	5 H 24 IV	肥前系?	鉢?	口縁部	2	19.2	(3.2)	灰白色
109	9 E 25 IV	肥前系	甕	口縁部	3	9	(5.5)	内外面鉛錠
110	9 E 1 III	肥前系	甕	口縁部	2	13.4	(3.2)	鉛錠
111	10 I 12 IV	肥前系	火入	全体			(4.7)	上部鉛錠
112	8 X 2 IV	肥前系	火入	全体			(28)	上部鉛錠
113	9 I 25 IV	肥前系	瓶	口縁部	2	10.2	(3.4)	内外面鉛錠
114	6 G 7 III	肥前系	皿	口縁部	2	13	(2.1)	被熱、灰白色
115	5 I 14 IV	肥前系	皿	口縁部	4	11.4	(1.3)	灰白
116	10 J 24 IV	肥前系	皿	底部			4.8	(2) 見込みドーナツ輪潤滑
117	9 I 8 IV	肥前系	皿	口縁部	2	11.6	(3.1)	灰白
118	9 I 18 IV	肥前系	皿	底部			4.6	(2.6) 灰白
119	5 G 10 IV	肥前系	皿	底部			4.4	(2) 被熱、灰白
120	8 H 17 IV	肥前系	皿	底部			4	(2.1) 黄土目、灰白
121	10 H 20 III	肥前系	甕	頸部				内外面鉛錠
122	8 J 16 IV	不明	?	口縁部	1	18.4	(2.4)	潤滑?
123	5 G 5 IV	不明	皿	口縁部	2	12	(3.2)	被熱、灰白色
124	10 E 7 IV	不明	瓶	口縁部	1	10	(2.8)	内外面鉛錠、青斑?
125	5 H 13 III	不明	?	底部			5.6	(2.6) 青褐色
126	6 I 6 IV	不明	皿	底部			4.2	(0.9)
127	5 H 2 IV	不明	すり鉢	口縁部				軟質、瓦質すり鉢
128	9 I 7 IV	土師質土器	皿	底部				糞切、全面ケル付蓋
129	6 G 2 IV	土師質土器	皿	口縁部	1	12.6	8	2.7 糞切?、内外面ケール
130	9 I 9 IV	土師質土器	皿	口縁部	2	15		糞切、内外面ケール
131	9 I 3 III	土師質土器	皿	底部				糞切
132	8 H 4 IV	土師質土器	皿	半分			5.4	(1.6) 回転糸切、全面ケール
133	9 J 25 IV	土師質土器	皿	底部			5	(1) 糞切
134	IHH19 IV	土師質土器	皿	口縁部	2	8.8	5.6	2.2 口縁部ケール (灯明組)
135	8 X 8 IV	土師質土器	皿	口縁部	2	12.2	7	(2.1) べづくね
136	6 H 18 IV	土師質土器	皿	口縁部	3	12.2		(2.6) べづくね
137	7 J 25 IV	土師質土器	皿	半分以上	12	10.2	4.1	2.1 べづくね、口縁部ケール
138	8 G 7 IV	土師質土器	皿	半分	6	10	2	べづくね
139	6 H 11 III	土師質土器	皿	口縁部	2	11.6		1.8 べづくね、内外面ケール
140	12222 III	土師質土器	皿	口縁部	2	10.8		(2) べづくね
141	4 G 8 IV	土師質土器	皿	口縁部	4	9.4	(1.8)	べづくね、口縁部ケール
142	6 K 25 IV	瓦器	火鉢	口縁部			46.5	黒色
143	6 I 3 IV	瓦器	火鉢	口縁部				
144	6 I 9 IV	瓦器	火鉢	脚部				I51 と同一個体か
145	HOK 3 IV	人形?						
146	6 H 20 IV	土師器	小型壺	口縁部	2	10.8	(3.6)	古墳時代
147	11 H 21 IV	土師器	小型甕	口縁部	1	10	(4.1)	古墳時代
148	10 I 16 III	須恵器	平瓶	口縁部	5	7.4	(5.3)	古墳時代
149	10 I 3 IV	須恵器	甕	全体				格子、同心円印記
150	IHH18 IV	製陶土器	平底バケツ	全体				
151	IHH 1 III	製陶土器	平底バケツ	全体				
152	IHH18 IV	製陶土器	平底バケツ	全体				
153	I2623 III	製陶土器	平底バケツ	全体				
154	9 K34 IV	製陶土器	平底バケツ	全体				

別表2 金属製品観察表

No	JIS分類	造機	部位	部機	現存長 cm	現存幅 cm	現存厚 cm	重量 g	材質	備考
1	6114	IV	盤		14.0	4.9	0.9	105.3	鉄	刃 5.2 × 4.9
2	8827	IV	小刀		17.7	2.4	0.3	19.0	鉄	刃渡り 12.0cm 基 5.7cm
3	9/22	IV	小刀		8.9	2.3	0.4	16.6	鉄	
4	8/21	III	劍		6.5	1.5	0.6	23.2	鉄	
5	6814	II	劍		8.6	1.4	0.5	17.8	鋼?	小刀の柄状で中央空洞
6	10821	IV	钢板		9.9	1.6	0.1	4.9	鋼	
7	7/9	IV	鉄錠		10.2	1.2	1.0	15.2	鉄	刃 3.0 × 1.2
8	618	IV	釘		5.5	0.5	0.4	1.5	鉄	
9	8/17	IV	劍		5.2	1.7	0.4	5.5	鉄	
10	11/16	IV	小刀		7.4	1.4	0.3	5.1	鉄	刃先が曲がっている 残存状況悪い
11	6125	IV	釘		8.3	0.6	0.5	12.3	鉄	頭 1.5 × 0.85 角釘 少し曲がっている
12	4810	V	釘		6.5	0.9	0.5	4.0	鉄	頭なし 曲がっている 角釘
13	8/13	IV	劍		7.8	1.2	0.9	28.0	鉄	曲がっている
14	8/7	Vb	釘		4.3	0.3	0.5	3.2	鉄	頭 1.2 × ? 曲がっている 角釘
15	7/18	IV	釘		5.2	1.0	0.4	6.8	鉄	頭は折り曲げ状で 0.7 × 1.0
16	54	SX000	Vb	鉄錠	15.7	1.2	1.1	28.8	鉄	木製品の矢絣に入った状態で出土 刃 8.6 × 1.2
17	581	V	小刀		8.1	1.7	0.4	12.0	鉄	真ん中が凹状に縮くなっている
18	11/13	Vb	小刀		18.5	1.9	0.4	35.8	鉄	刃渡り 11.0cm 刃に穴があいている 基 7.5cm
19	585	Vb	小刀		6.3	1.7	0.6	7.2	鉄	
20	4525	IV	馬掛の箆		21.1	2.4	1.0	147.0	鉄	
21	4518	Vb	帶					441.0	鉄	
22	4518	SX001	Vb	鉄錠	16.1	30.6	0.3		鉄	内耳付き 頭 3ヶ
23	8/5	IV	小札		4.3	2.6	0.2	1.8	鉄	黒色漆 2 × 4個の円形穴
24	613	IV	鉢玉		1.3	1.4	1.3	11.9	鉛	
25	634	IV	鉢玉		1.2	1.3	1.2	10.2	鉛	
26	915	III	銅鑄金具		4.9	2.8	0.6	2.7	銅	
27	8815	II	煙管		1.8			2.3	銅	履歴 1.5cm 金指
28	10H12	IV	煙管		7.2			4.2	銅	履歴 1.5cm 火薬が管内形で側面に径 0.1cm の穴あり
29	5817	IV	煙管		4.8			1.6	不明	吸口
30	10/24	IV	煙管		6.2			7.8	銅	履歴 1.5cm
31	611	IV	煙管		6.1			7.5	銅	履歴 1.7cm
32	10/22	III	煙管		6.9			4.2	銅	吸口 広径 1.4cm 狹径 0.4cm
33	8/85	IV	煙管		5.7			3.2	銅	吸口 広径 1.2cm 狹径 0.5cm ねじれている
34	8/1	III	鉢玉		1.3	1.4	1.3	11.4	鉛	
35	8/14	III	鉢玉		1.2	1.3	1.3	10.4	鉛	穴 (径 0.15cm, 深さ 0.4) があいている
36	5810	I	銅鑄金具		1.6	1.6	0.1	0.3	不明	花形状
37	7/18	IV	帶		12.5	1.3	0.3	24.8	銅?	横縫あり 先端破損
38	9/20	II・III	帶		16.7	1.2	0.2	12.5	銅	微細に曲取りしてある
39	9/1	IV	銅鑄金具		2.0	1.8	0.3	4.0	銅	

別表3 銀貨一覧表

No	銀貨名	グリッド	部位	書体	初鋳年	重量	備考
1	開元通寶	10H3	IV帶		841(唐)	2.11	背宣なし 上月
2	祥符通寶	7/17	IV帶		1009(北宋)	3.69	
3	祥符通寶	7/24	IV帶		1009(北宋)		
4	祥符通寶	9/13	IV帶	篆書	1009(北宋)	2.22	
5	天聖通寶	10/18	IV帶	篆書	1023(北宋)	3.04	
6	皇宋通寶	7/18	IV帶	真書	1038(北宋)	3.15	
7	嘉祐通寶	11/21	IV帶	篆書	1056(北宋)	2.99	
8	治平通寶	6/14	IV帶	真書	1068(北宋)		
9	熙寧通寶	6/11	IV帶	真書	1068(北宋)		
10	熙寧通寶	7/25	IV帶	真書	1068(北宋)		

No	銘写名	グリッド	層位	書体	初跡年	重量	備考
11	照寧元寶	7I25	IV層	篆書	1068(北宋)	2.70	
12	照寧元寶	10J4	IV層	篆書	1068(北宋)		
13	元豐通寶	7J21	IV層	篆書	1078(北宋)	2.87	
14	元豐通寶	8J10	IV層	行書	1078(北宋)	2.64	
15	元祐通寶	8G10	IV層	行書	1078(北宋)	2.59	
16	元祐通寶	7I21	IV層	行書	1086(北宋)	2.68	
17	元祐通寶	6I9	IV層	篆書	1086(北宋)	2.55	
18	紹熙元宝	6H1	IV層	篆書	1094(北宋)	2.60	
19	元符通寶	7J24	IV層	行書	1101(北宋)	3.68	
20	聖宋元寶	5G10	IV層	篆書	1101(北宋)		
21	慶元通寶	7I25	IV層		1205(南宋)	3.29	背六
22	洪武通寶	9I13	IV層		1366(明)		
23	洪武通寶	7J18	IV層		1368(明)	3.93	背一錢
24	永樂通寶	7J11	III層		1406(明)	2.38	
25	永樂通寶	7J5	III層		1406(明)	3.15	
26	寛永通寶	5I5	III層				背文 文難 古寛永
27	寛永通寶	6I1	III層				背文+波 古寛永
28	寛永通寶	9I22	III層				新寛永
29	寛永通寶	5H15	III層				背文 露元 新寛永
30	寛永通寶	5G25	III層				新寛永

別表4 木製品観察表

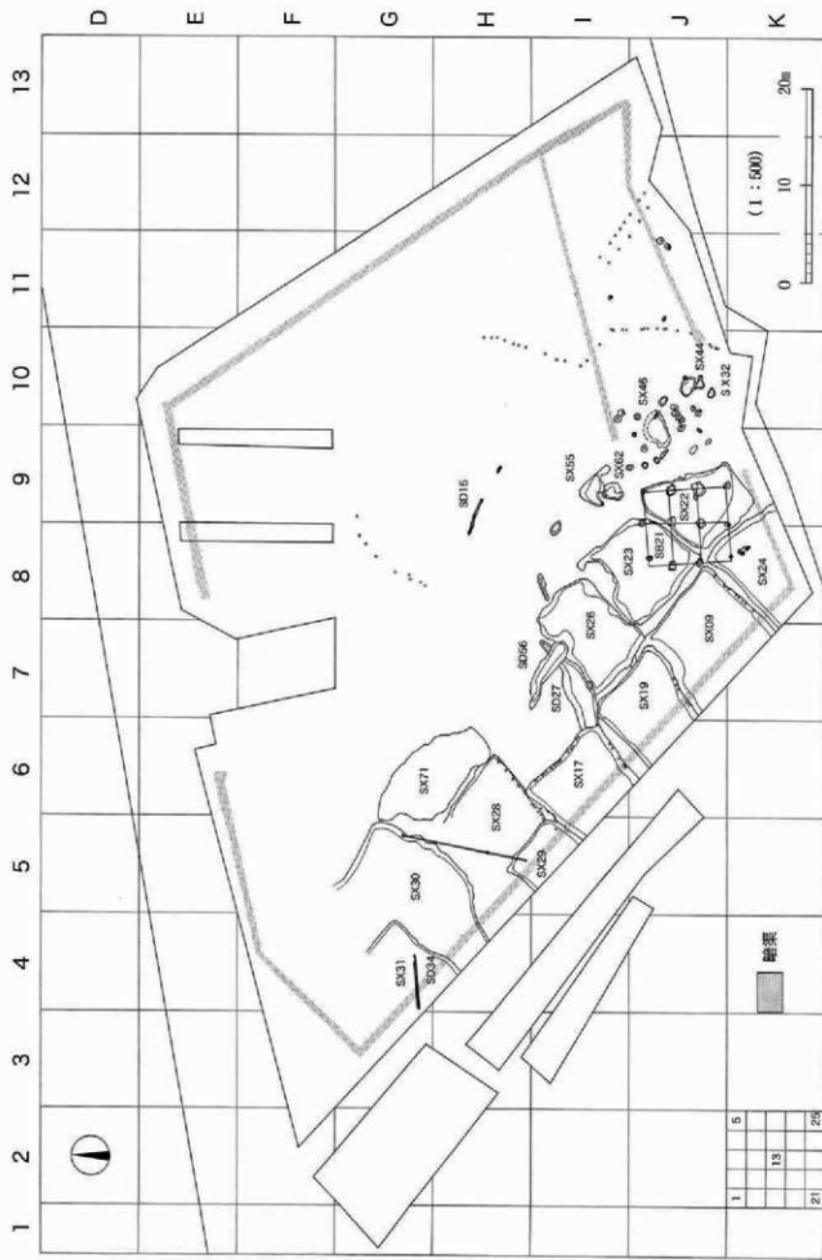
No	製品	グリッド	層位	法 量(cm)			本取り	備考(形容等)
				長さ	幅	厚さ		
1	筒物(純)	8K5	III層				(10.4)	綫木 高さ2.2cm、洗物、口縁部斜率平2/16、削り出しの両面が欠損している
2	筒物(純)	6I17					綫木	底径6.8cm、高さ1.5cm、内面斜を有する。黒を下地に朱(漆)を塗る。底部周囲。
3	筒物(純)	9I1	III層				綫木	口径14cm、底径6cm、高さ2.9cm、全面黒漆の上に赤漆の2層塗り
4	筒物(純)	10K21	III層				綫木	内外全面漆塗、削り出し高台、内側は黒漆。口径7.6cm、底径7.0cm、高さ2.0cm。
5	筒物(純)	6I18	IV層				綫木	底径5.5cm、内側に赤漆、外側に黒漆。底部に約1.5mmの孔。削り出し高さ
6	鉛錠矢柄	5H(SX30)	V b 層	8.1	1.2	1.2	不明	管状、表面は前面黒漆塗り、管根の厚さは約1.5mm
7	箸状	8I21	III層	6.7			0.5 純木	直箸、赤漆、竹漆
8	棒状	8H22	III層	7.4	1.2	0.7	板目	全面黒漆、木と片側面、先端削り出し部は接着に利用した漆が糊く塗られている。先端部は松化。
9	箸状	3F	鉢土	7.1			0.4 純木	直箸、赤漆
10	横錠	8J9	IV層	3.4	4.9	0.4	不明	全面に黒漆塗り、やや赤茶色の調和で中央部に窓切()を残す。表面の2箇所の窓の内側に墨、削り出しを入れている。推定全長約8cm。底部の底径3.4cmほど、1/2強。
11	板状	6K25	IV層	4.8	1.6	0.5	板目	径約4mmの孔1ヶ所があげられ連続して溝が4軒く
12	板状	7I14	IV層	5.1	1.2	0.6	板目	径約4mmの孔1ヶ所が側面部にあり
13	板状	7I16	IV層	7.1	2.1	0.7	板板目	長方形板状の木版、細部付近に径約2mmの孔1つ決り。両端は切削加工。
14	板状	7I2	IV層	15.4	4.4	1.0	板目	径5mmの孔2ヶ所。其方形状のが取れた楕円孔。
15	棒状	3F	鉢土	13.6	1.7	1.0	板目	径2mmの孔が先端を丸めた端部に1ヶ所穿孔。両端欠損
16	棒状	8I23	III層	14.5	1.2	0.7	板目	溝状の板、両端に溝がありほど孔が2ヶ所ずつ計4ヶ所。端は穿孔。一端は破損。
17	板状	5H18	IV層	10.9	3.1	0.9	板目	中央に径5mmほどの穿孔1ヶ所あり、先端部は三角形に削り出し。側端部は当面に加工されている。杆(梅竹)?
18	棒状	5H23	不明	9.0	1.2	1.1	板目	角棒状、先端棒状に薄くなる。3倍の孔3ヶ所。圓面上部の端に一部削り。
19	板状	7I8	IV層	8.6	2.8	1.0	板目	用途不明・側端2箇所に留めぐらぎの木耳。径は約3mm。
20	板状	6I2	III層	10.4	2.6	2.0	角柱	角柱で先端棒状に尖る
21	筒状	5H20	IV層	11.7	2.0	1.1	板目	筒の部分は圓盤柄円状、端部は薄く削り込み筒状にし、両端は丸。
22	板状	7I22	IV層	10.5	3.5	0.6	板目	長方形板状の木版、細部付近に径約6mmの孔。圓下面下部側研磨
23	板状	4H8	III層	10.5	3.7	0.7	板板目	径4mmほどの孔が端部に3ヶ所、長方形、圓端欠損?
24	板状	8S1	IV層	13.5	2.8	0.4	板目	板皮?組、隠穴2ヶ所
25	板状	10J21	II層	13.8	2.9	0.7	板目	細い板状、全表面黒漆、長絶縁側は直線状でもう一方は使損して詳細不明。

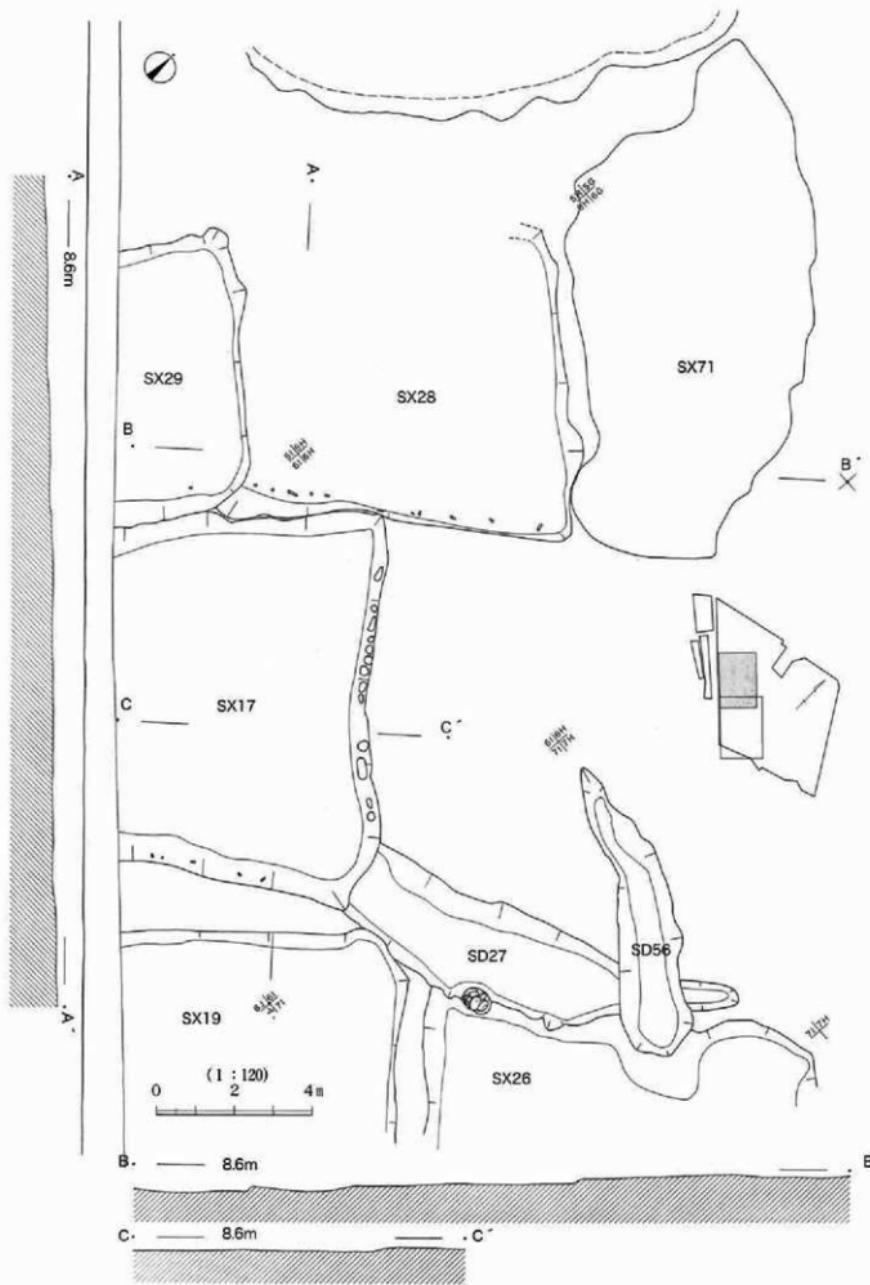
No	製品	グリッド	層位	計量(cm)			本取り	備考(成形等)
				長さ	幅	厚さ		
26	板状	717	IV層	7.5	5.1	1.0	板目	彫刻部？彫跡欠損、用途不明
27	板状	6825	IV層	6.5	3.1	0.5	板目	用途は不明
28	糸巻？	662	IV層	5.3	4.0	0.9	板目	凹部に抉りがあり、糸巻き？
29	板状	1015	III層	5.9	3.3	0.9	板目	8角形形状、径約5mmの孔が並んで二つ穿孔。
30	下駄	6129	IV層	18.8	8.6	1.0	板目	火、底部厚さ3.1cm、底面下駄、一部を欠損、板の前後表面を薄くしている。横円に近い楕丸菱方形。
31	下駄	716	IV層	16.6	6.6	1.4	板目	中、表面厚さ2.6cm、足跡あり。底面穴は表面から斜め前に向かって穿孔、底面穴はまっすぐに開けられている。底面下駄。横円に近い楕丸菱方形。
32	下駄？	923	III層	12.7	6.5	0.9	板目	小、墨がない。底面表面欠損
33	人形	6125	IV層	16.0	2.4	0.9	板目	全身、女性？、彫刻部表面欠損
34	人形	616	IV層	5.8	2.6	0.9	板目	頭部のみ、頭部の抉りと彫跡がやや粗野に削りだし
35	鳥形	718	IV層	5.1	5.3	1.0	板目	尾部欠損
36	鳥形	636	IV層	8.0	1.8	0.5	板目	両端細く加工
37	鉤柵	495	III・IV層		2.1	(5.0)	板木	扁平な形状の鉤柵。上面に幅2mm、深さ1mmの溝がある。約2/3が欠損
38	鉤柵	787	表土		6.7	(4.1)	板木	底板、削りだしによって比較的堅く成形。上面縁部面取り。中心に鉤柵心棒の入っていた穴があり、鉤柵が付着。
39	木札	922	I層	4.5	3.7	1.0	板目	列目・縦であるため約0.5cmの孔1ヶ所
40	木札？	1016	III層	7.3	2.5	0.4	板目	上部欠損、下部は三角形状に削り、先端は平端
41	木札？	837	IV層	12.2	2.1	0.4	板目	下部先端は三角形
42	木札	6113	IV層	14.6	1.9	0.4	板目	墨書き木札、上部山型、下部欠損
43	木札？	1114	III層	13.3	2.7	0.4	板目	先端部の縁を細く削り出し、先端一部欠損
44	木札？	6123	IV層	11.1	2.6	0.5	板目	下部の切削線に斜めの彫りと段差あり
45	木札？	911	III層	9.1	2.2	0.4	板目	上部欠損、下部は細かく異なるが先端は丸まっている、墨書き無し
46	木札？	7116	IV層	8.5	1.9	0.7	板目	上部欠損、下部三角形に削り

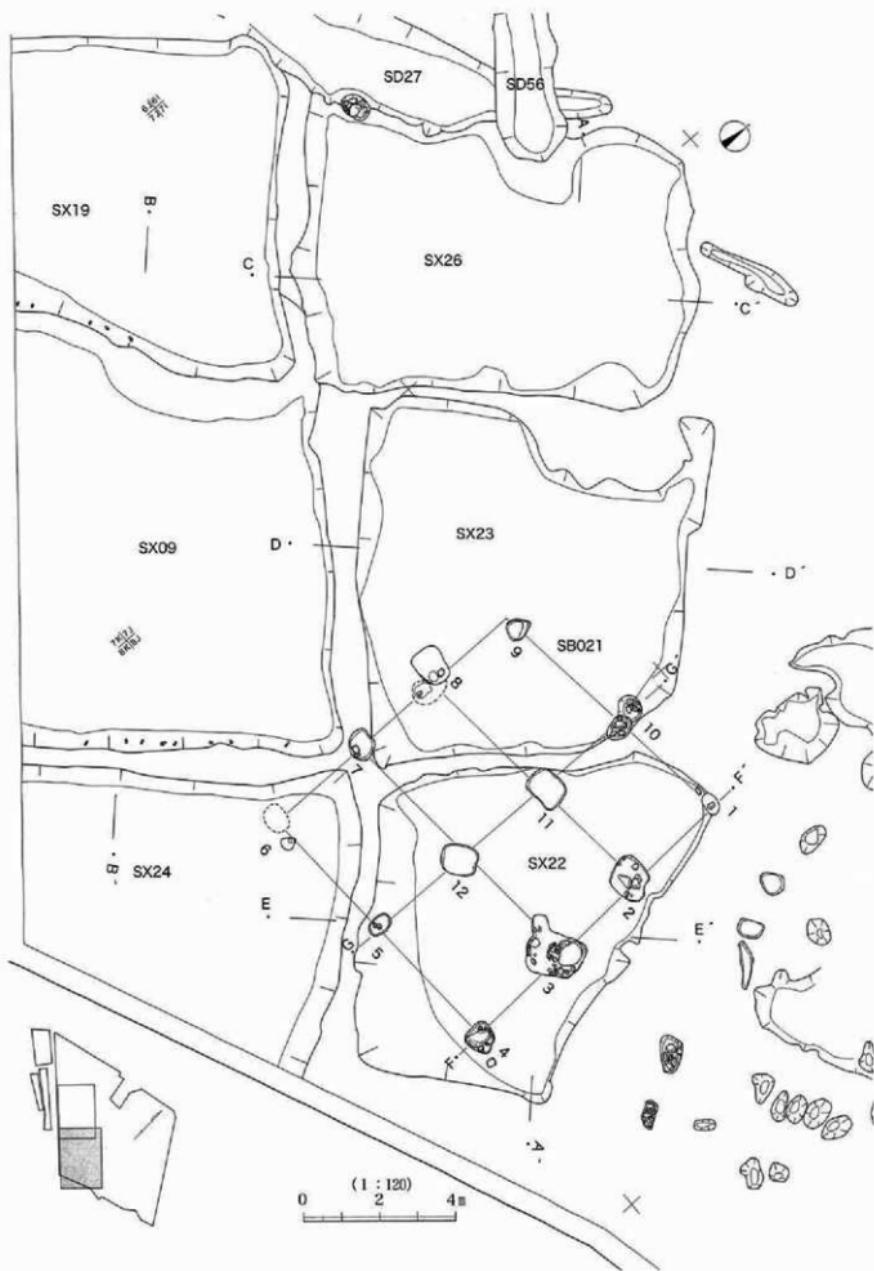
図 版

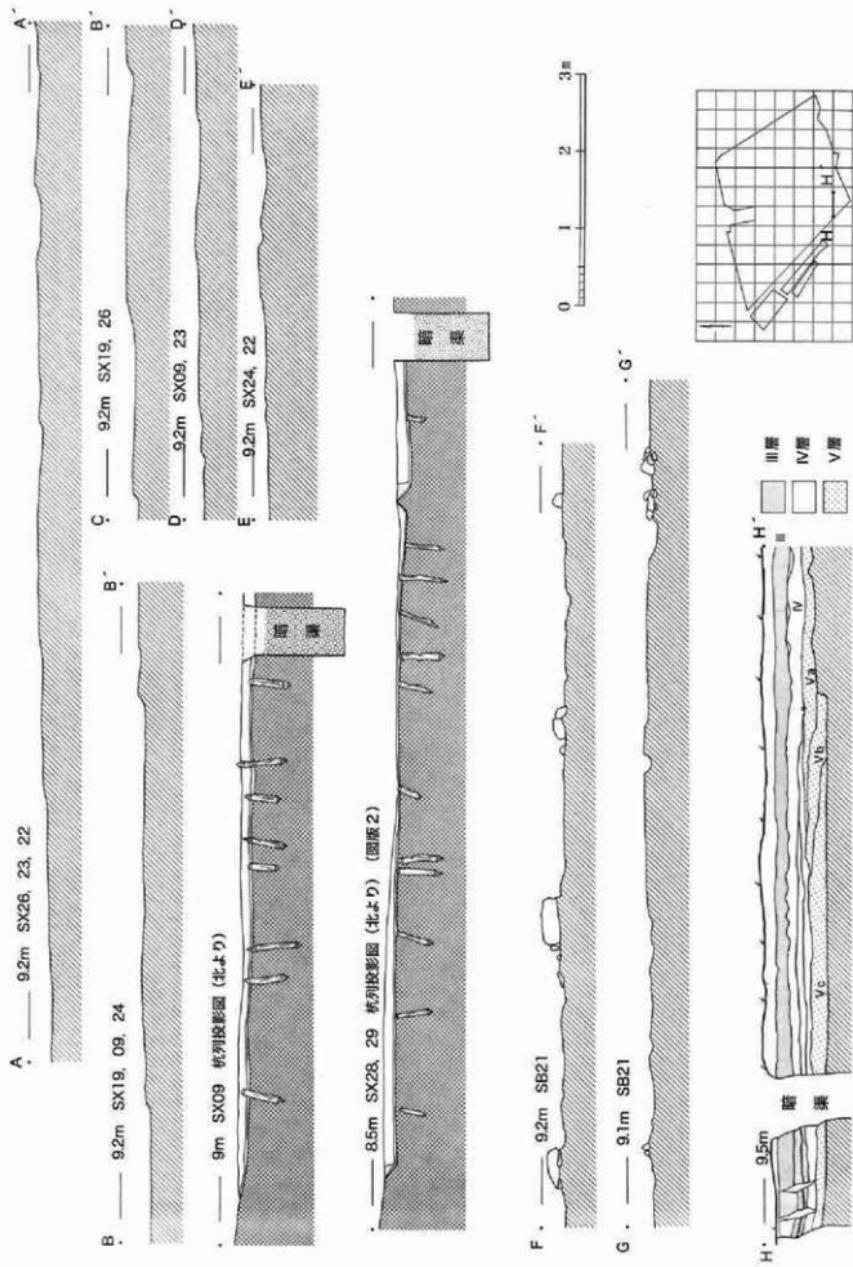
造構全体図

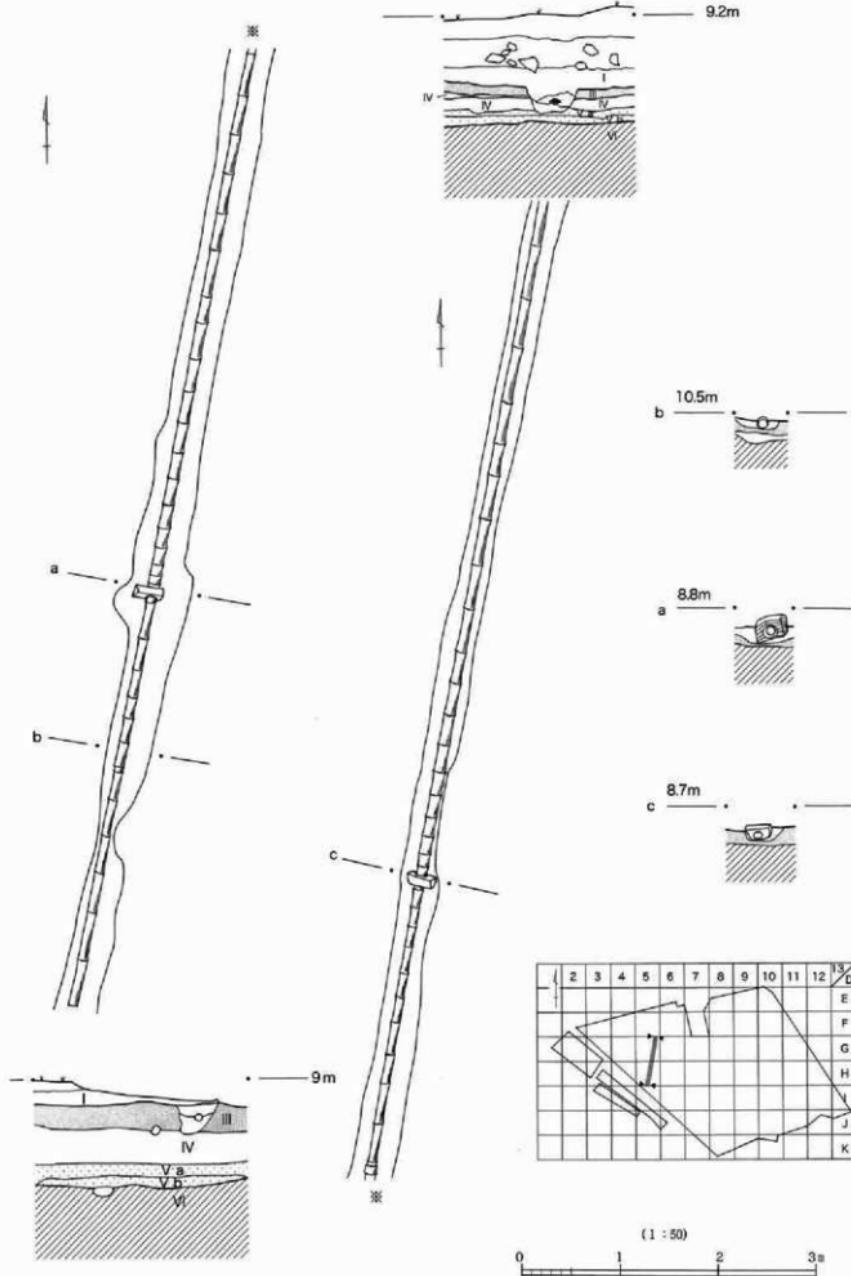
圖版 1

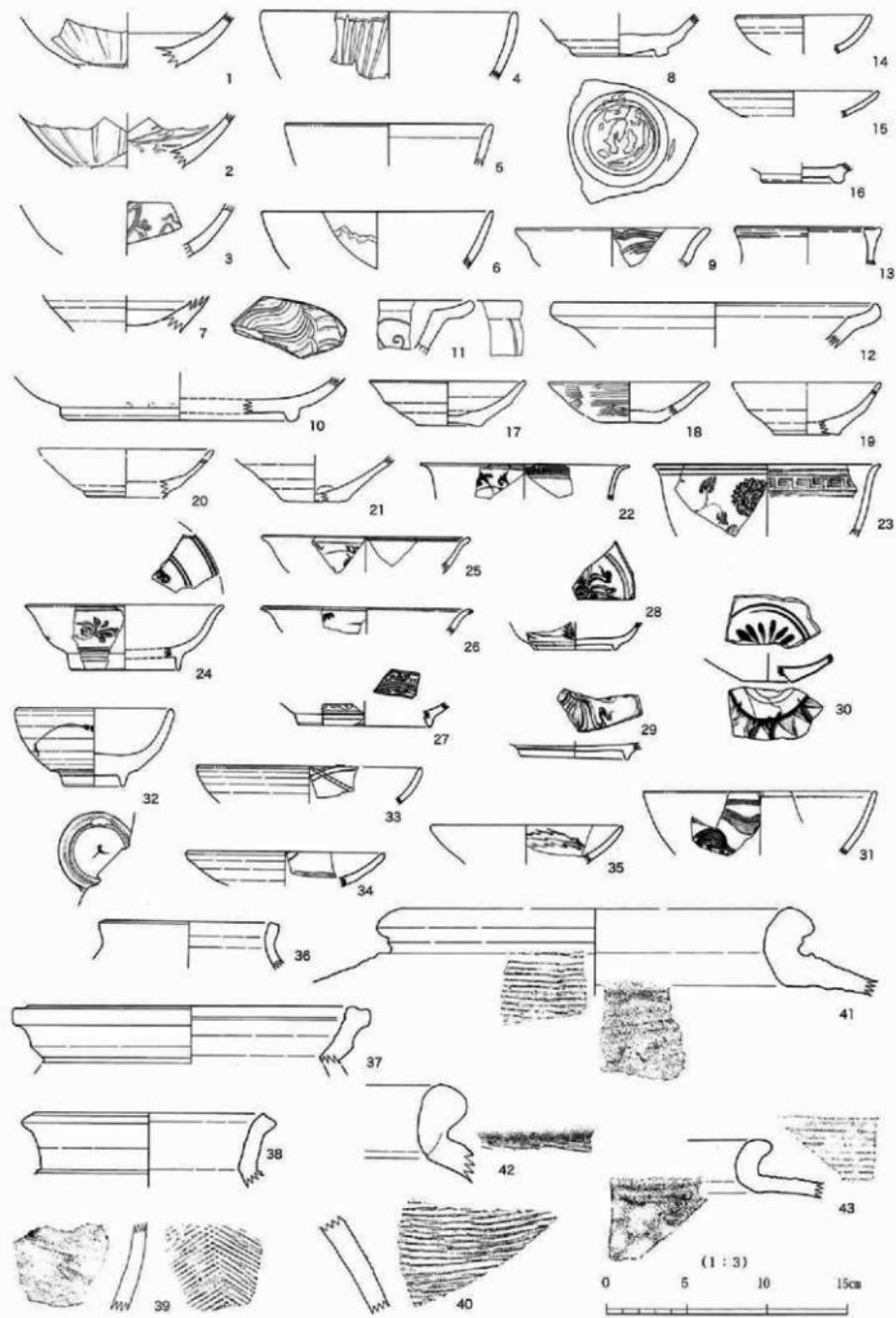


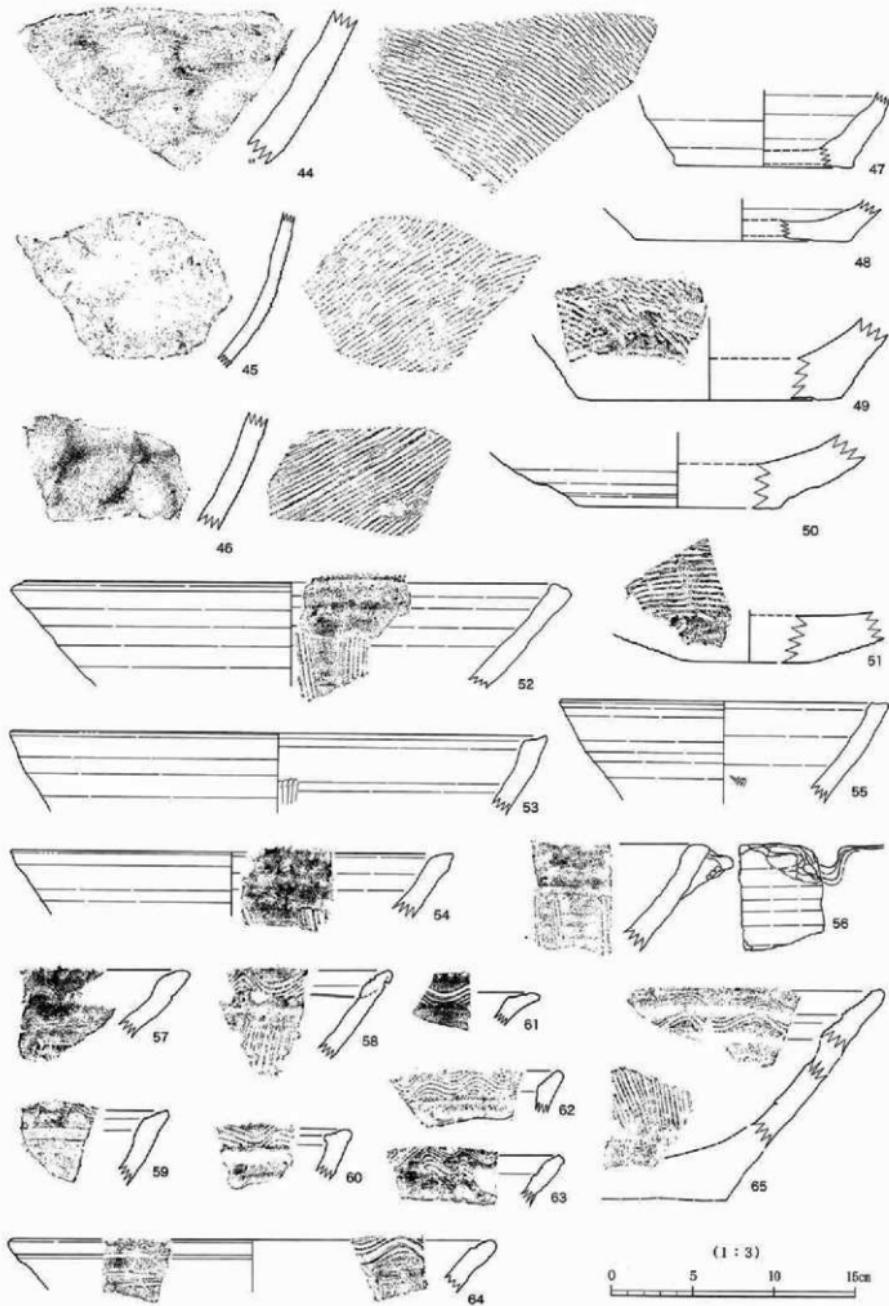


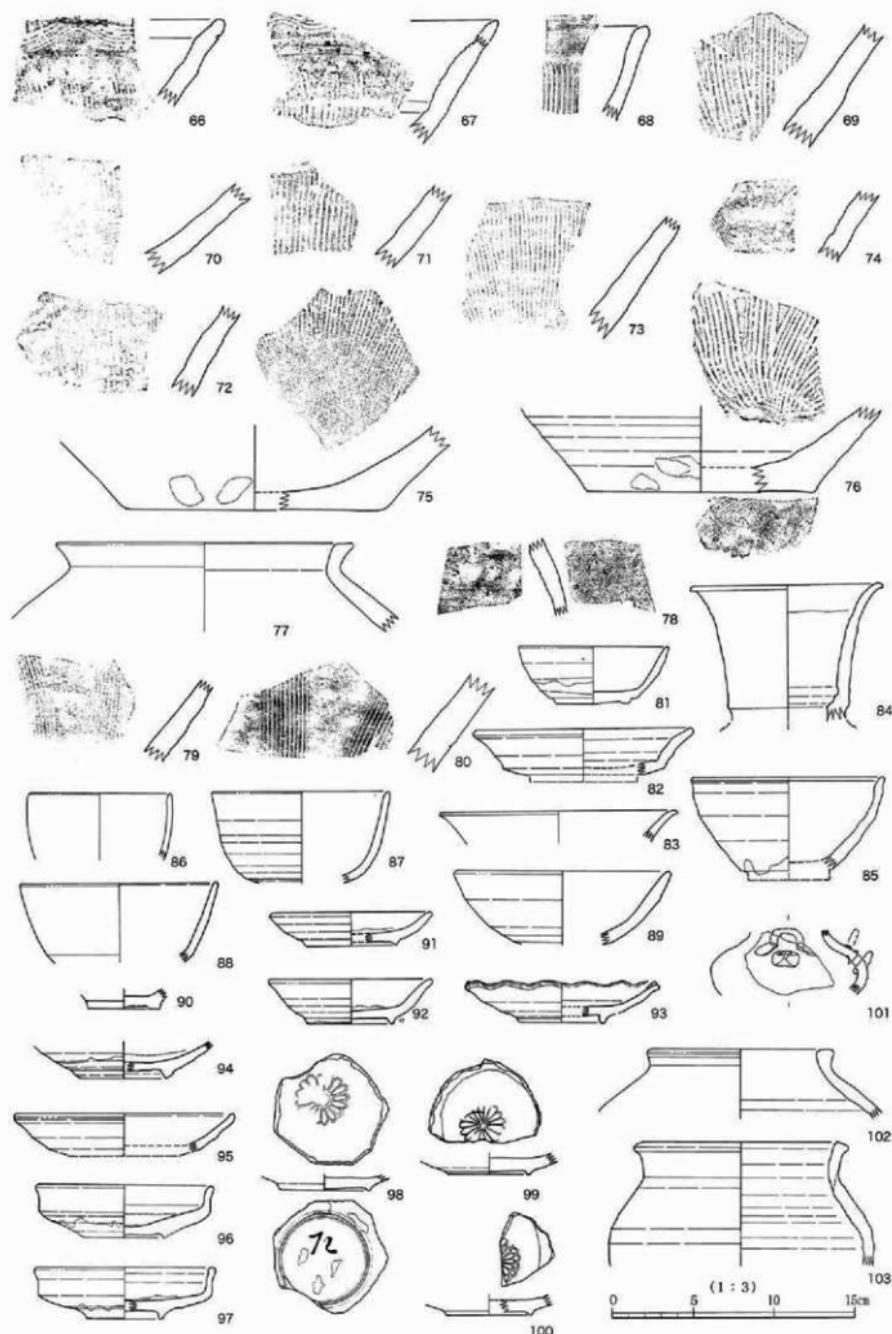


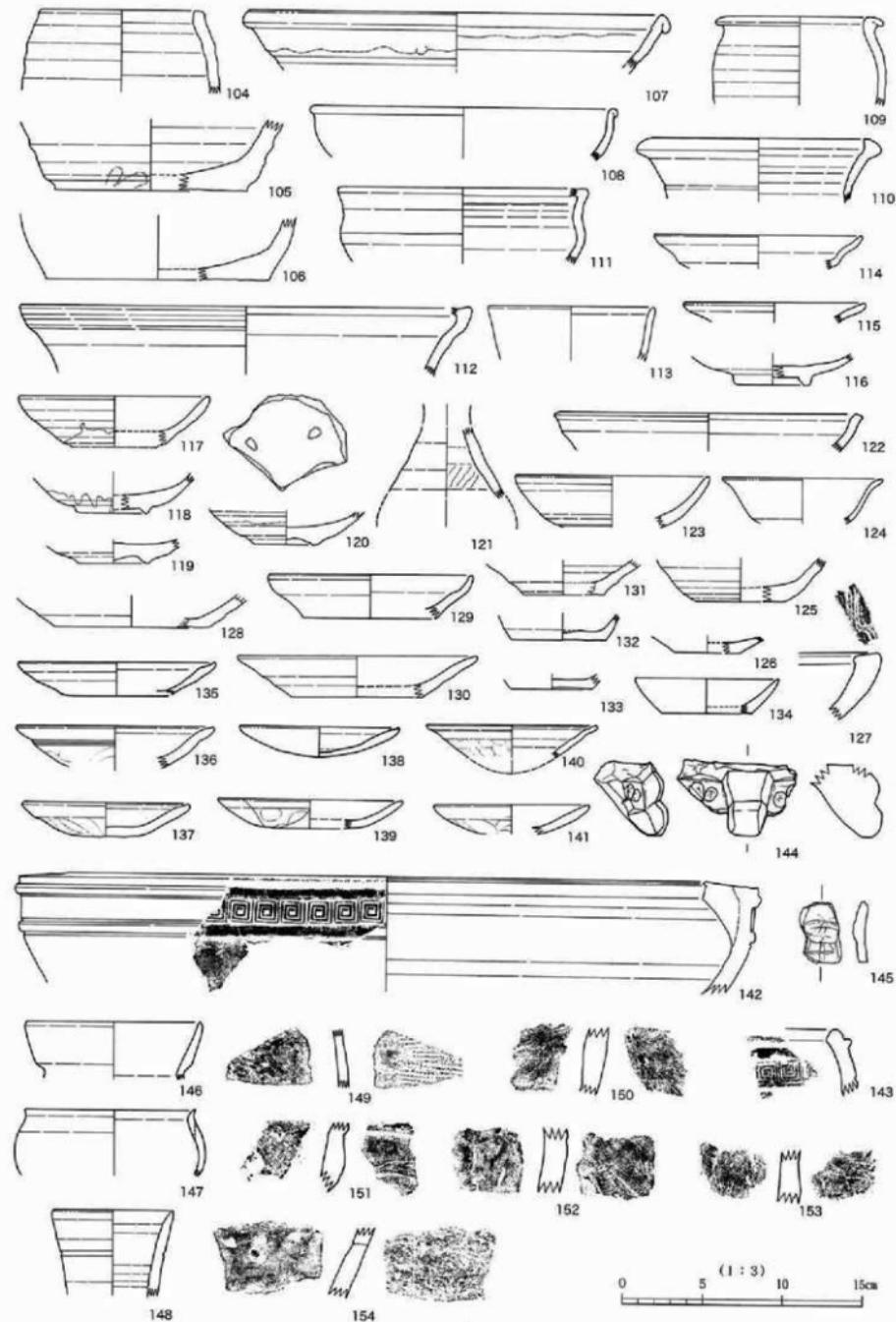


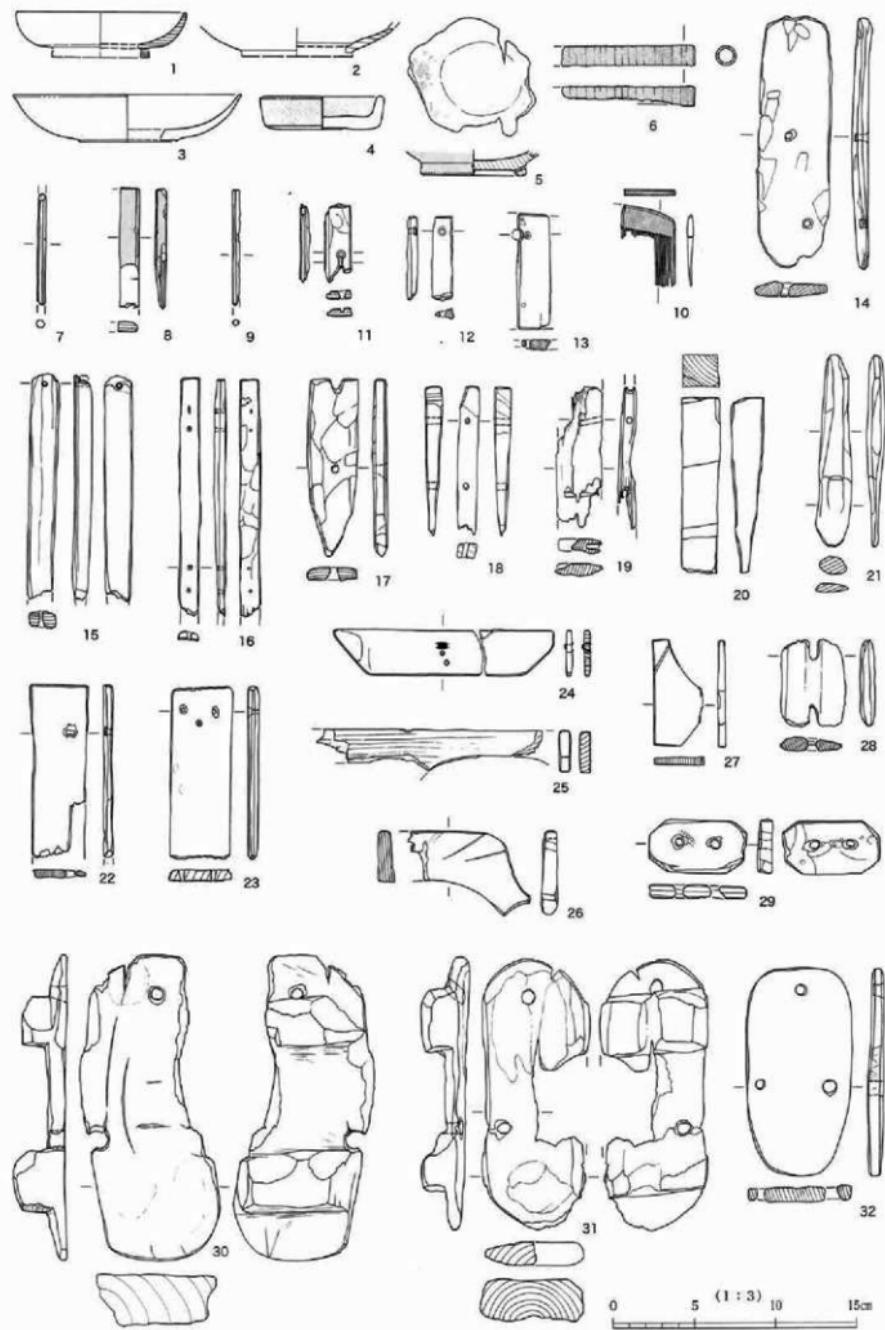


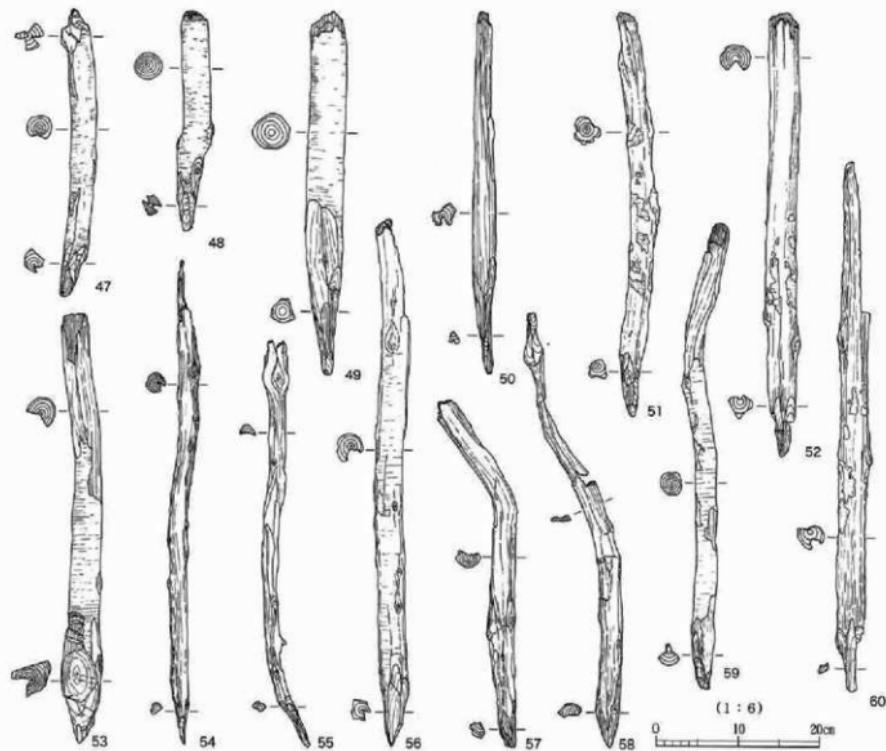
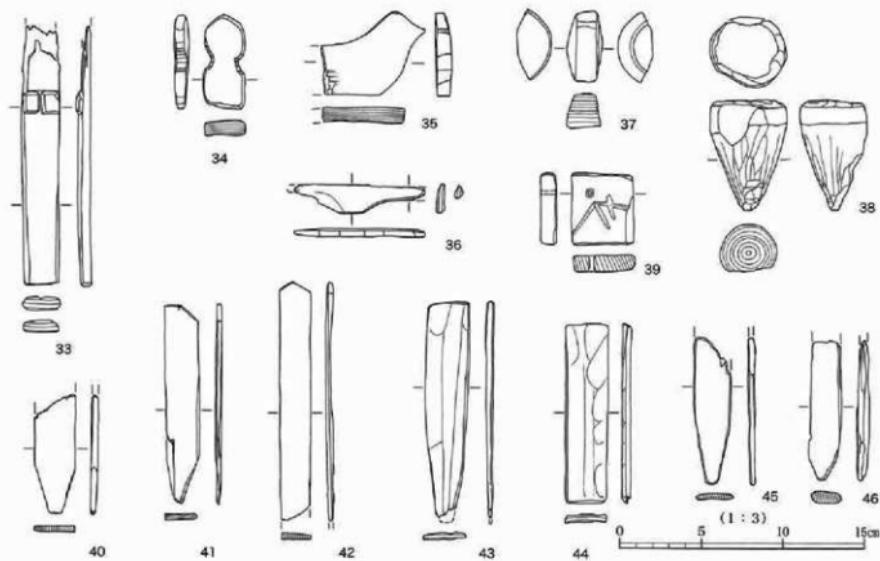


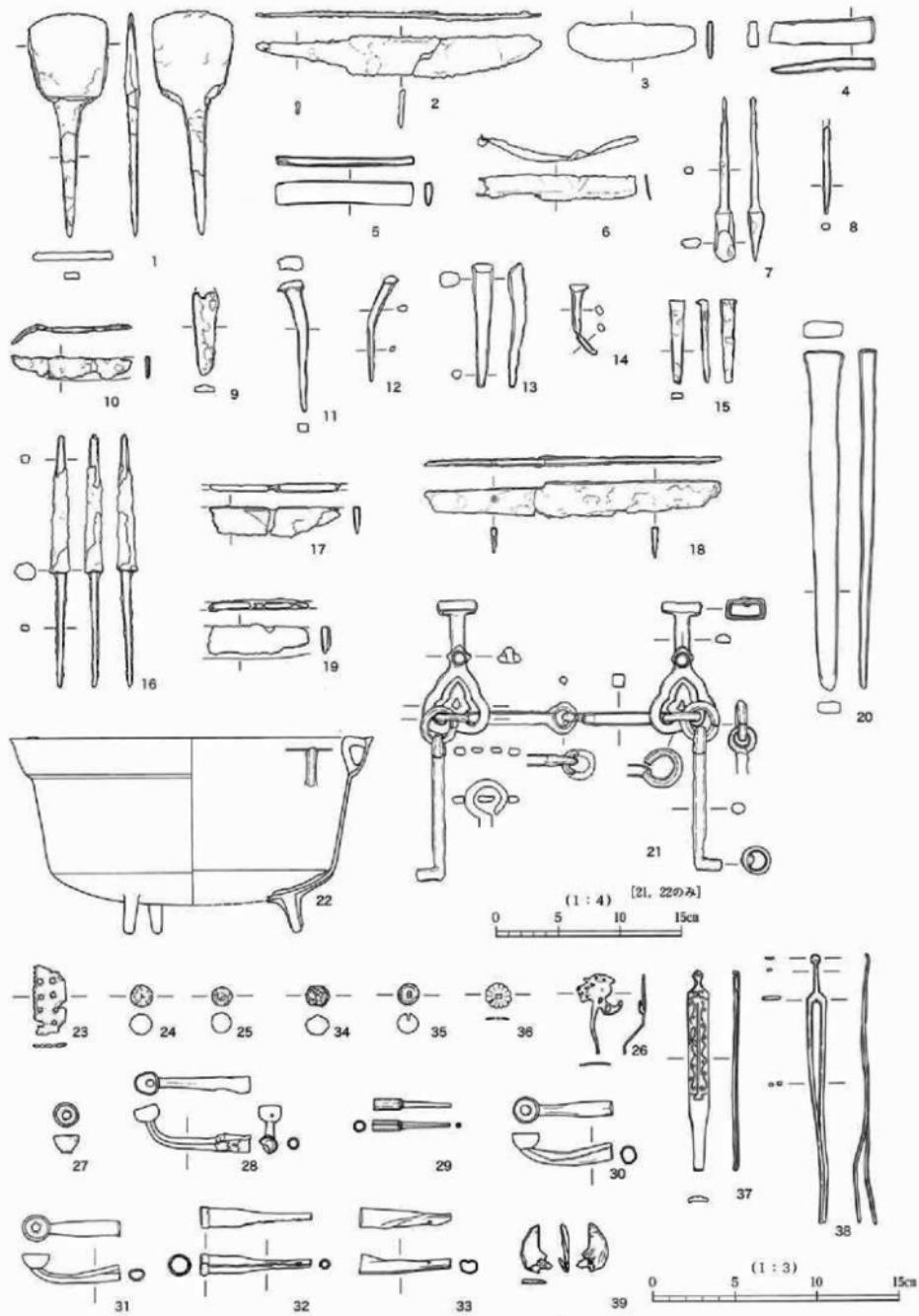


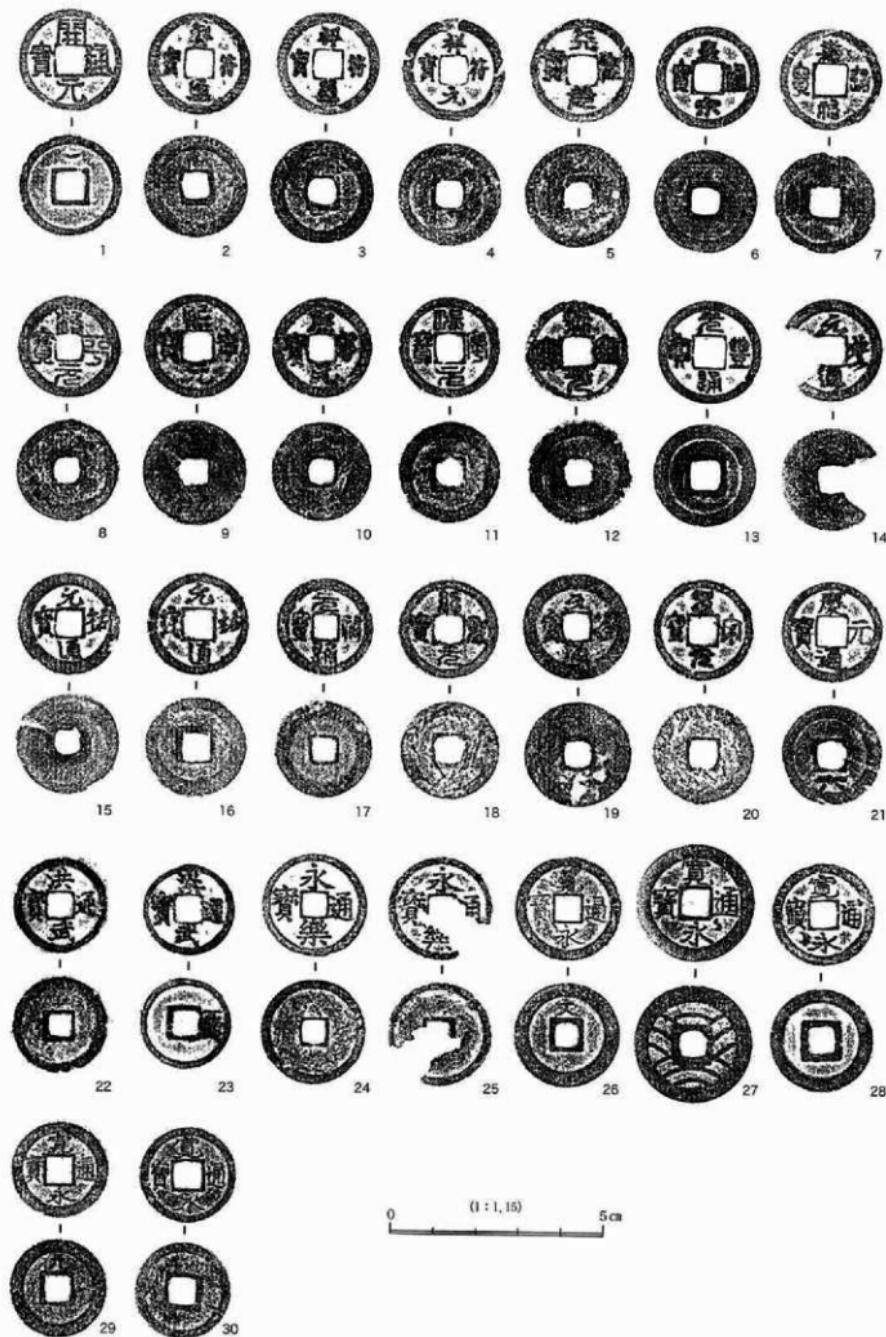


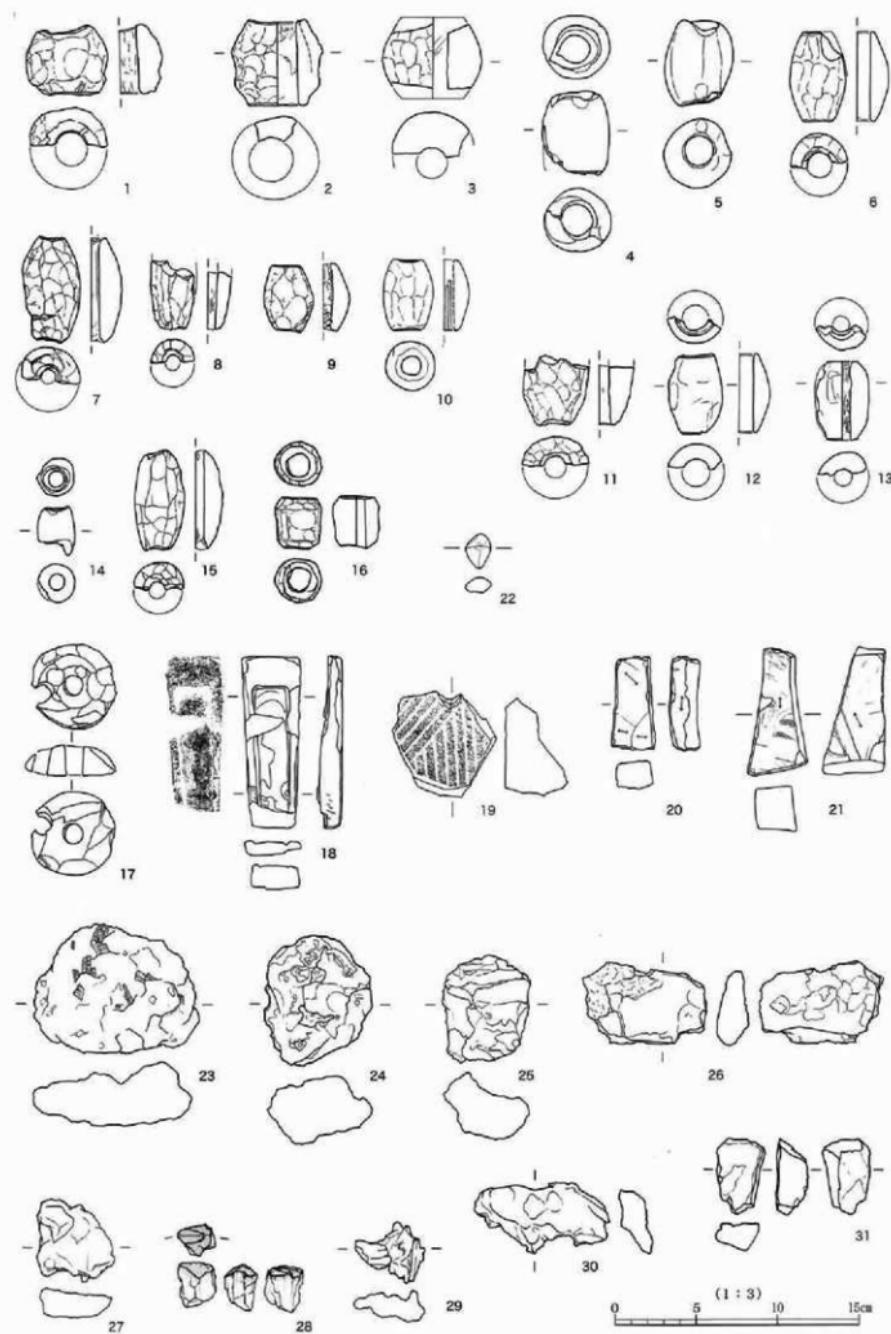


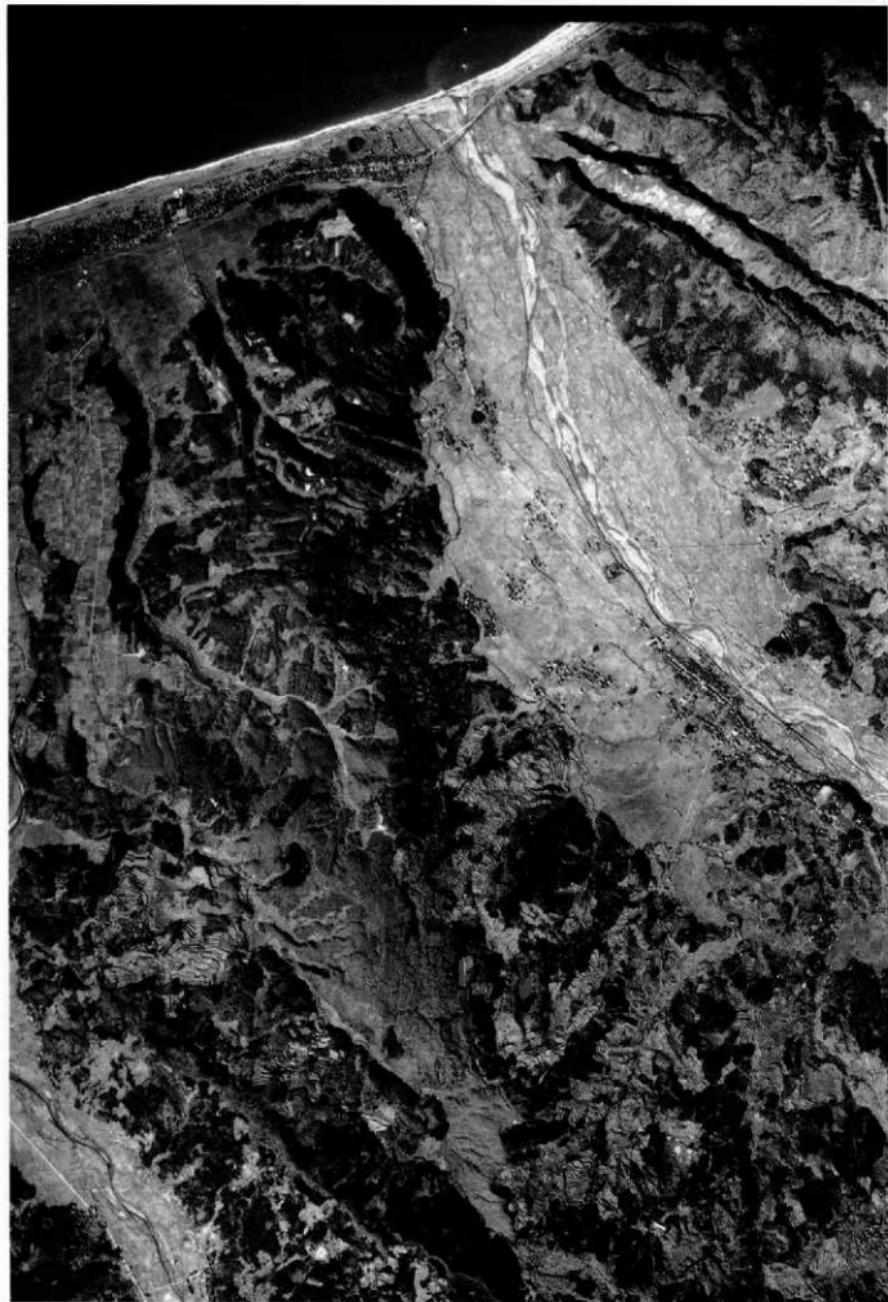












遺跡付近空中写真（1947）

（米軍撮影）



遺跡遠景（南より）



遺跡遠景（西より）



道熱温泉（北より）



道熱完結状況



遺跡空中写真



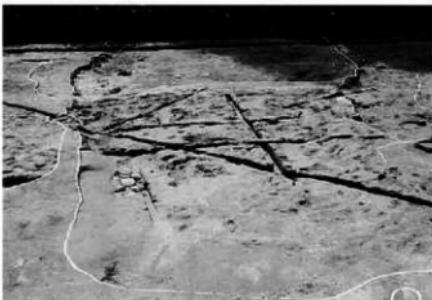
方形区画遺構



方形区画遺構



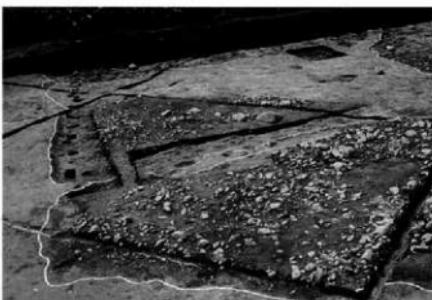
方形区画造構（南側）



同 (SX19、26)



同 上



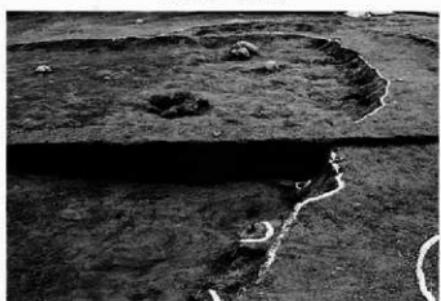
同 (SX71、28、29)



同 (SX31 土層断面)



同 (SX26)



同 (SX19 土層断面)



同 (SX19)



礎石建物跡 (SB21)



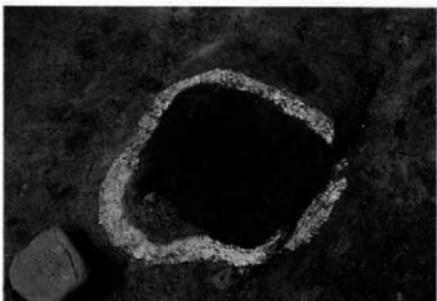
同 (SB21)



同 (SB21)



SB21-4



同左



竹管道機



同 左



竹管道機



SX34



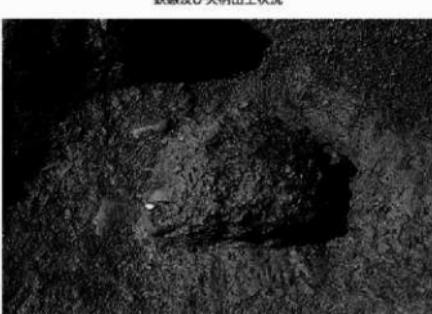
木簡出土狀況



鐵鏃及び矢柄出土狀況



下駄出土狀況



鉄錐出土狀況



土層断面



土層断面



土層断面 (6 H 東から)



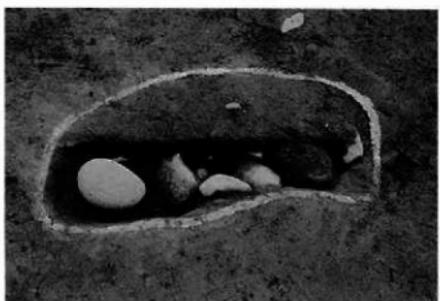
土層断面 (6 G 東から)



9, 10, J, K付近



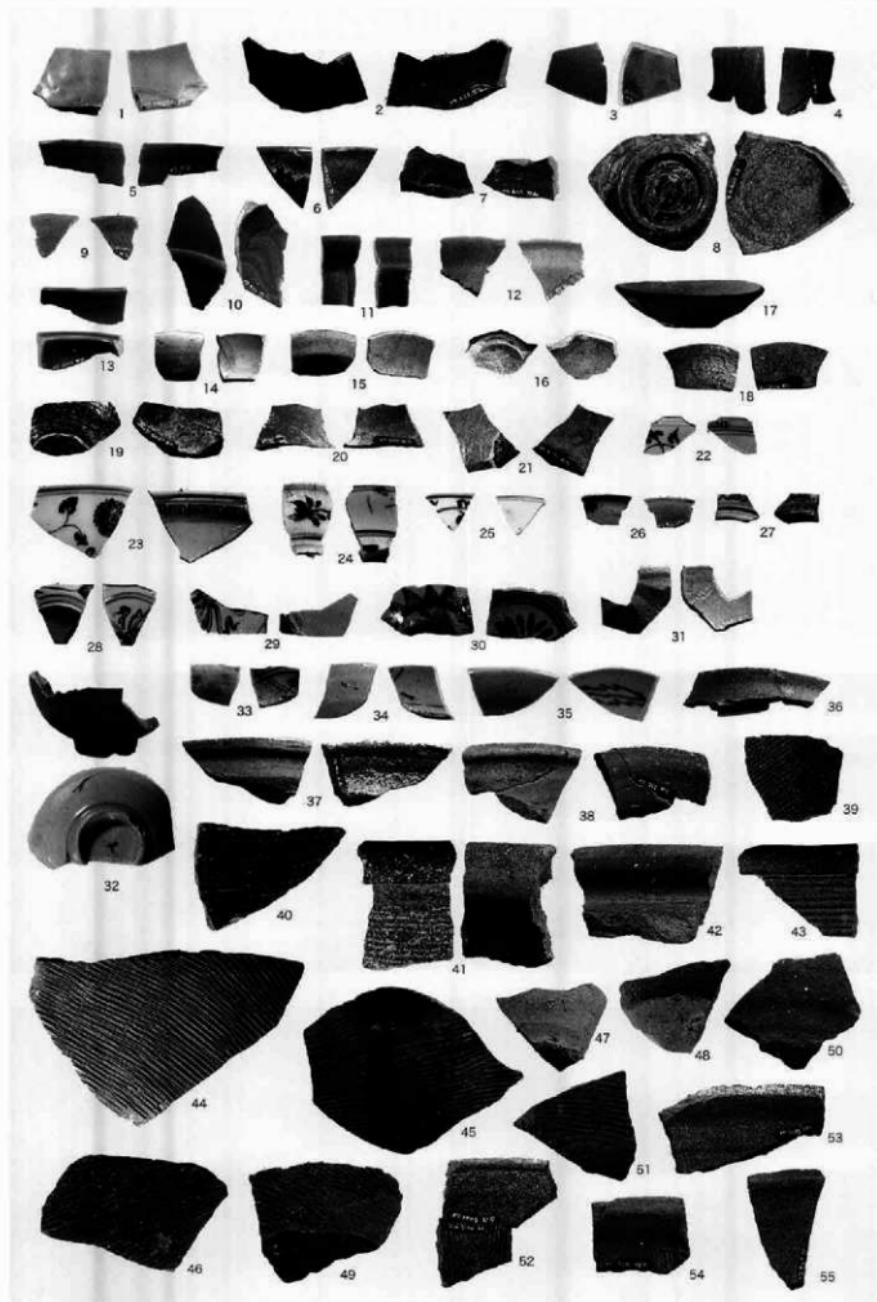
10, J付近

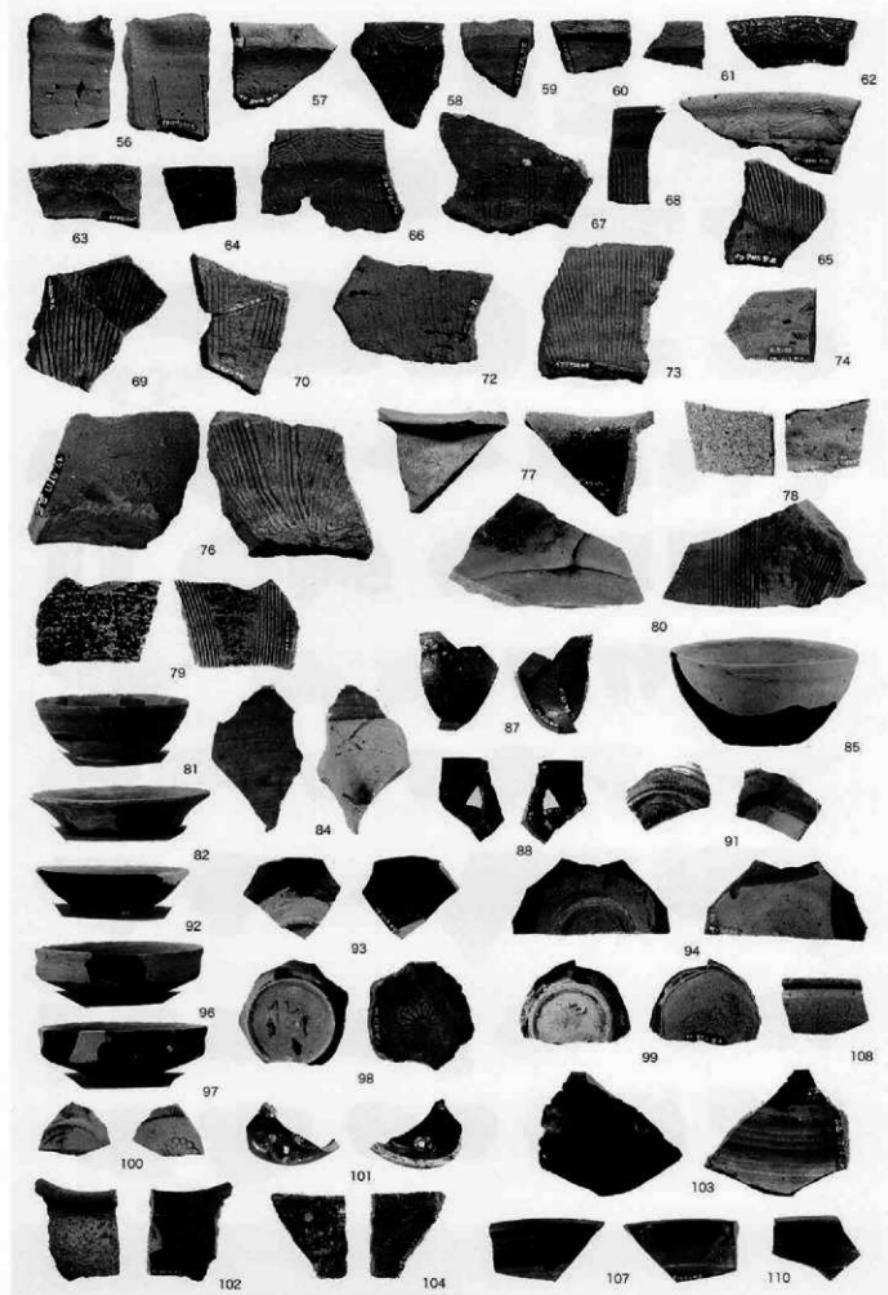


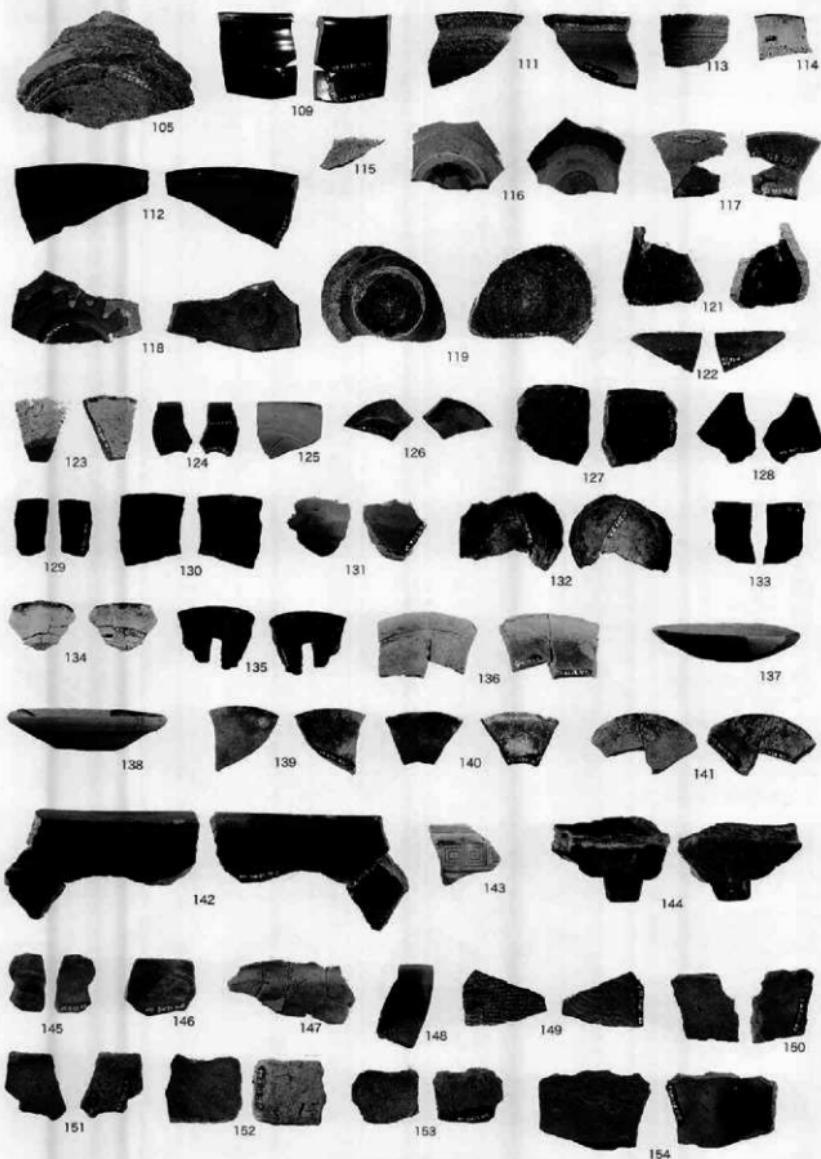
P 52 断面

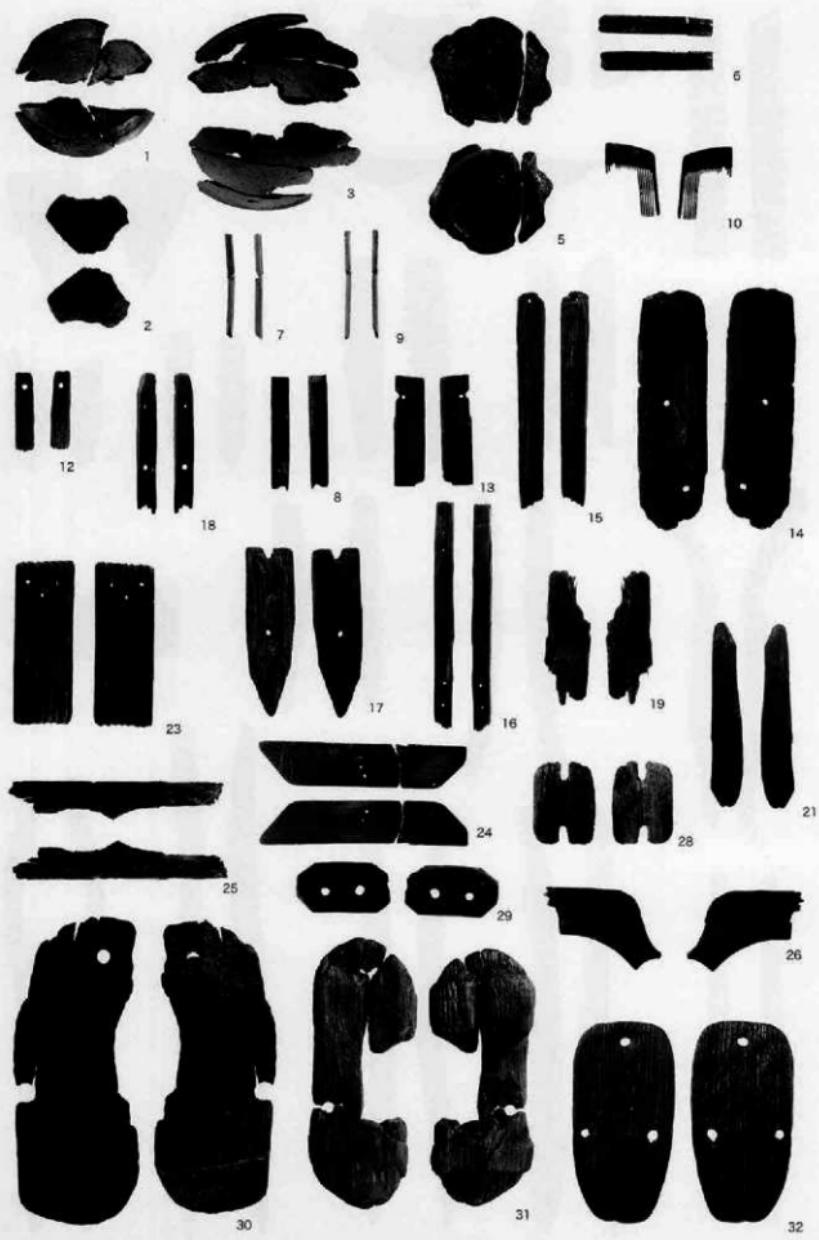


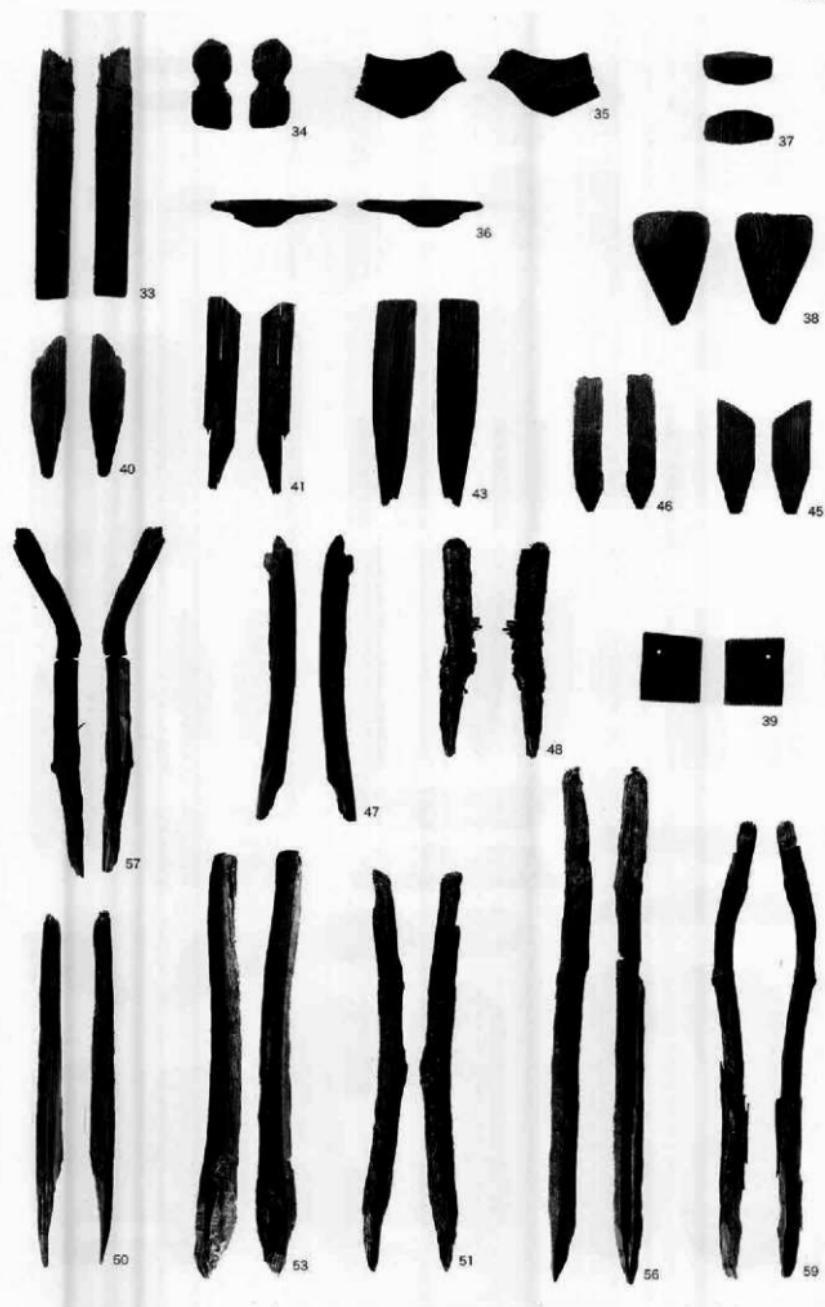
P 52 完成

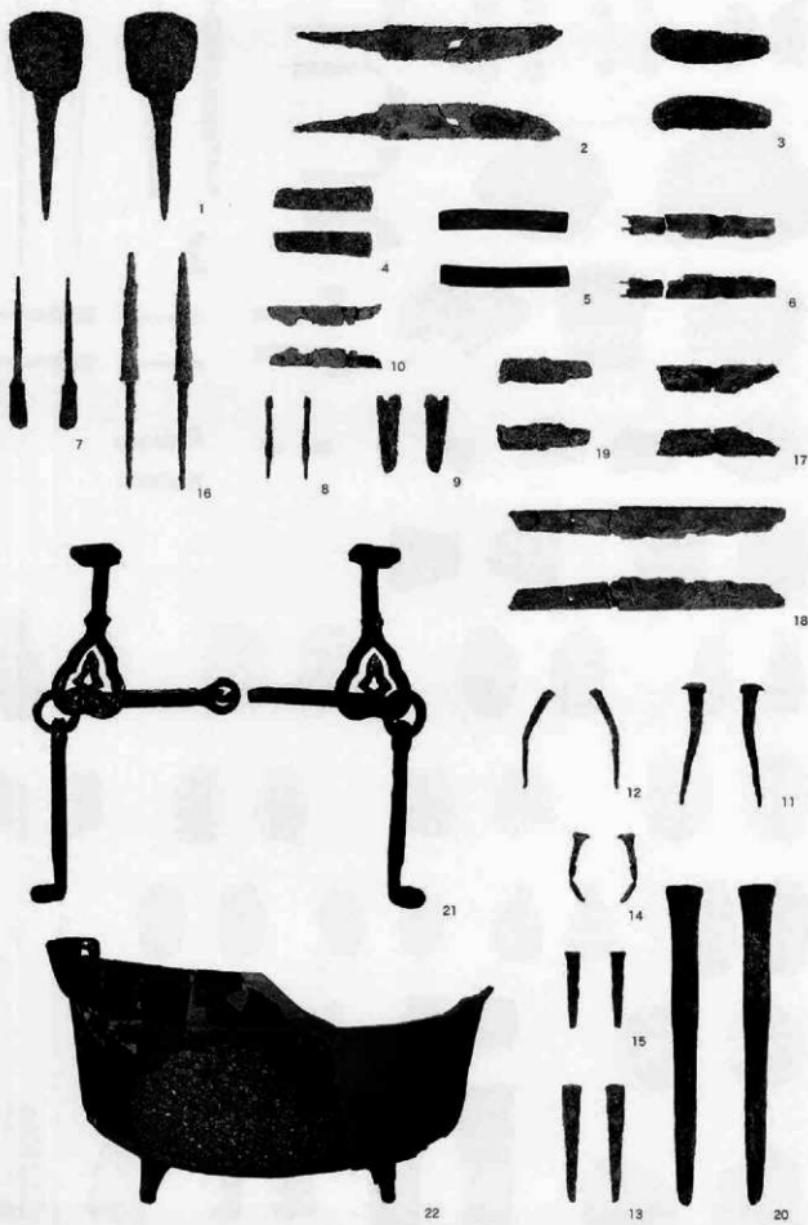


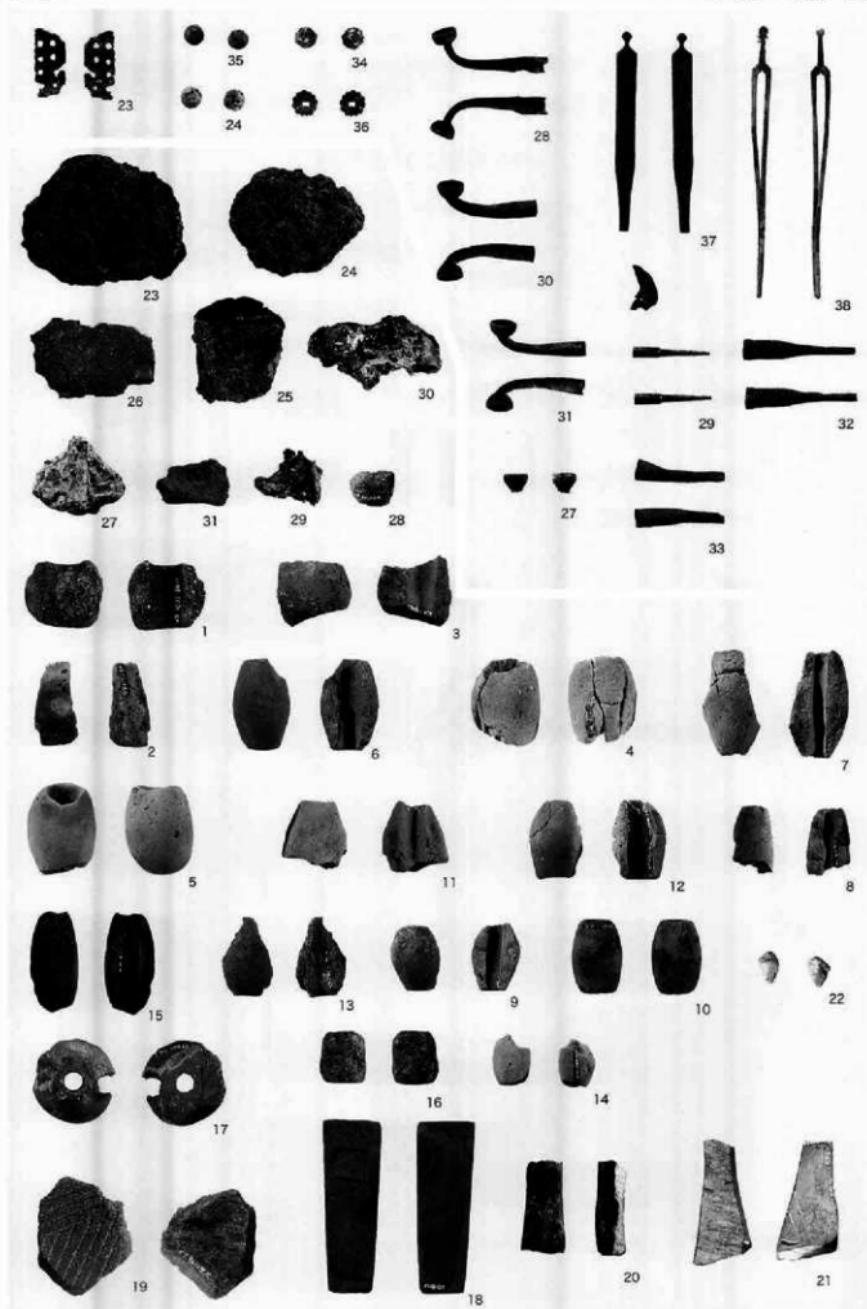


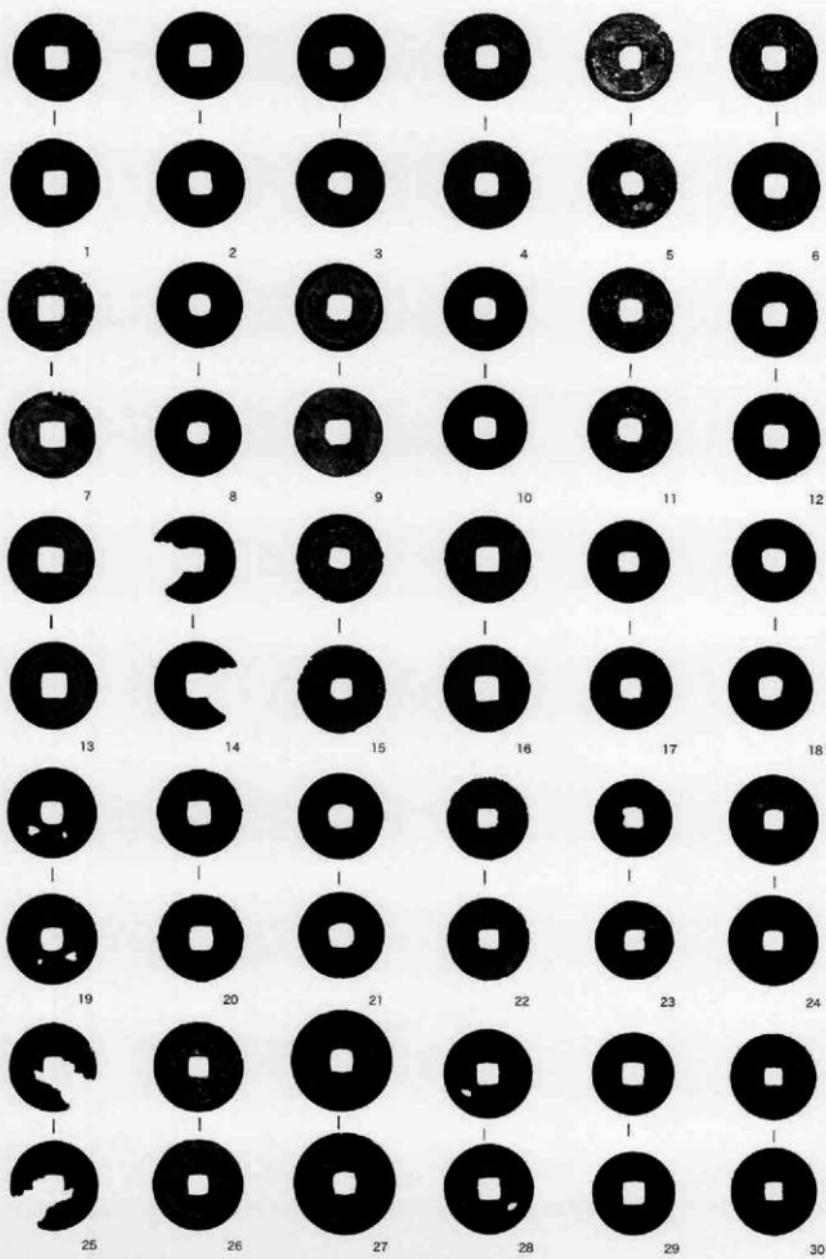












報告書抄録

ふりがな	いわくら						
書名	岩倉遺跡						
副書名	一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第114集						
編・著者名	山本肇 小野塚徹夫 本間克成 高橋保						
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL0250(25)3981						
発行年月日	2003(平成15)年3月31日						

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩倉遺跡	新潟県糸魚川市大字田伏 字岩倉403番地ほか	15-015	149	37度 3分 12秒 (H-半径)	137度 54分 45秒 (H-半径)	20010419 ~ 20010927	4,700m ²	道路(糸魚川東バイパス)建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩倉遺跡	遺物包藏地	中世(室町時代) 近世(江戸時代)	方形区画遺構(水田跡) 礎石建物	中近世の土器・陶磁器(土師器、珠洲焼、青・白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、肥前系陶磁器等)中近世の木製品(木簡、碗、皿、下駄、箸等) 中近世の石器・石製品(石臼、硯等)中近世の金属製品(簪、鉄鏹、小刀、鑿等)	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第114集

一般国道8号 糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書

岩倉遺跡

平成15年3月25日印刷 発行・編集 新潟県教育委員会
 平成15年3月31日発行 〒956-8570 新潟市新光町4番地1
 電話 025(285)5511
 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1
 電話 0250(25)3981
 FAX 0250(25)3986
 印刷・製本 株式会社 第一印刷所
 〒956-8724 新潟市和合町2丁目4番18
 電話 025(285)7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第114集『岩倉遺跡』正誤表

頁	位置	誤	正
抄錄	市町村コード	15-015	15216